「百舌鳥・古市古墳群」世界遺産シンポジウム

世界遺産
「百舌鳥・古市古墳群」を
守り、活かし、そして未来へ

❖ シンポジウム記録集 ❖

2023

羽曳野市世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」保存・活用実行委員会
（羽曳野市教育委員会、NPO 法人フィールドミュージアムトーク史遊会、羽曳野まち歩きガイドの会、四十四の会）

文化庁
令和４年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）

例　言

本書は、令和３年（2021）12 月 18 日に LIC はびきの（羽曳野市立生活文化情報センター）ホールMで行われた、「「百舌鳥・古市古墳群」世界遺産シンポジウム　世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」を守り、活かし、そして未来へ」の内容をもとにして作成しました。

同シンポジウムについては、主催は羽曳野市世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」保存・活用実行委員会（羽曳野市教育委員会、NPO 法人フィールドミュージアムトーク史遊会、羽曳野まち歩きガイドの会、四十四の会）で、令和３年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）を受けて実施しました。

なお、講演者等の肩書は当時のものです。

本書を作成するにあたり、中久保辰夫、下田一太、中村俊介の各氏からご理解、ご協力を賜りました。また、本書の挿入写真の一部については、高槻市、八尾市、保田紀元氏よりご配慮を頂戴しました。

目　次

例　言

◆世界墳丘墓見聞録－みえてきた百舌鳥･古市古墳群の文化的意義－ …1
中久保 辰夫（京都橘大学 文学部 歴史遺産学科 准教授）

◆世界の土製建造物より考える百舌鳥・古市古墳群の保存と復元 …13
下田 一太（筑波大学 人間総合科学学術院 世界遺産学学位プログラム 准教授）

◆岐路に立つ世界遺産～表面化する矛盾と課題 …36
中村 俊介（朝日新聞大阪本社 編集委員）

◆パネルディスカッション
「世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」を守り、活かし、そして未来へ」…56
パネラー：中久保 辰夫、下田 一太、中村 俊介
進　　行：伊藤 聖浩（羽曳野市教育委員会 世界遺産・文化財総合管理室 文化財課）

表紙は、古市古墳群の盟主墳である応神天皇陵古墳（誉田御廟山古墳）

世界墳丘墓見聞録 ーみえてきた百舌鳥・古市古墳群の文化的意義ー

京都橘大学 文学部 歴史遺産学科 准教授　中久保 辰夫

皆さん、こんにちは。京都橘大学の中久保と申します。今日はどうかよろしくお願いいたします。

私は、大学に入った 18 歳の頃の夏休みに初めて古墳の発掘調査をしてからこれまで、基本的には毎年、古墳の発掘調査をしてきました。来年で 40 歳になるのですが、人生の大半を古墳の調査で費やしてきたという、そういう人間になります。それで、古墳を調査するだけではなくて、世界各地にある古墳を、実は古墳という名前は日本の独特な呼び方でして、墳丘墓や墳墓と翻訳する場合が多いのですが、世界各地のお墓参りをしてきました。今日は、日本にある古墳が世界的に見ても独特な文化を持っているという、そういう話を中心にさせていただきたいというふうに思います。

これから古墳の話をずっとしていくわけですが、古墳時代は、西暦 3 世紀半ば、邪馬台国の女王卑弥呼が活躍した、その晩年ぐらいの時期から始まって 7 世紀に至るまで、約 350 年間続いた時代になります。北は東北、南は南九州まで、非常に広い範囲に共通した独特な前方後円墳という古墳が築造された、そういった時代になるわけです。

私は、古墳の勉強をするために、地図を準備して、古墳を見に行ったときに、いろんなメモも必要ですからメモ帳と筆記用具を用意して、もちろんカメラを肩にかけて、それでさまざまな古墳を見て参りました（図 1）。恩師である大阪大学の福永伸哉先生が中心になって、百舌鳥・古市古墳群を世界文化遺産に登録するにあたり、世界の墳丘墓文化と比較したときに、日本の古墳文化というのは一体どんな特徴があるのだろうかという研究を、この 10 年、特に精力的に進めてこられました。幸運にも、私も世界の古墳を見てまわるのに連れて行っていただきました。

図 1　古墳の歩き方（本日の講演内容）

そうすると、古墳という大きな墳丘を持つ墓が持っている歴史的な意義、文化的な意義、これも世界と日本では大きく異なるということが勉強できました。さらに古墳が置かれている環境も、非常に異なっているということもわかってきました。これから、いろんな墳丘墓の写真が出てきます。古墳の周りがどういった環境にあるのかも含めて、写真を見ていただければというふうに思います。新型コロナウイルスの世界的な蔓延（まんえん）で感染防止

の観点から、世界中を気軽に旅をするということもなかなか困難なご時世にあるわけですけれども、私のスライドを見ていただきながら、わずかばかりでも世界各地を旅した気分になっていただければ、というふうに思います。

まず、日本の古墳からお話をしていこうと思います。最初に取り上げたいのは、羽曳野市にある誉田御廟山古墳（応神天皇陵古墳）になります。陵墓ですから、兆域への立入りは禁じられています。ただし、考古学・歴史学の16の学会・協会が毎年1年に1回、「陵墓に立ち入らせていただきたい」という要望をずっと出しておりまして、見学する機会があります。この写真は、2011年2月に撮影したものでして、ちょうど10年ほど前になります（図2）。誉田御廟山古墳の内堤に立ち入る、そういった観察の機会がありまして、私はそこに参加することができました。

図2　誉田御廟山古墳（応神天皇陵古墳）の内濠・内堤

今ご覧いただいている写真は、そのときの写真になります。墳丘の本体ではなく、周濠の周りをめぐる堤ですけれども、堤をこうやって見学すると、周濠という古墳の周りを取り巻いている濠の部分が、非常に広いということがよくわかりました。写真を見ていただくと、人の大きさと濠の大きさ、皆さんから見て左のほうに写っているのが墳丘本体になるのですけれども、非常に大きい。

私は、この見学をする少し前に、大学の近くにある古墳を発掘していました。誉田御廟山古墳は5世紀の前半に造られた古墳で、今見ていただいている古墳（待兼山5号墳）は、豊中市にある5世紀の後半に築造された古墳です（図3）。少し時期差はあるのですが、同じ5世紀という時代に造られた古墳になります。見ていただけるとわかるように、これは非常に小さいのです。溝も浅くて、墳丘はあまり高く積まれていなくて、もう削平されていました。こういうのを見ると、同じ時代の、同じ古墳とは言っても、一方は非常に大きい。もう一方は非常

図3　待兼山5号墳（豊中市）の発掘調査

に小さい。誉田御廟山古墳の周濠の中に、待兼山５号墳が入ってしまうぐらい小さいということになります。

こういった古墳の規模の違いは、日本の古墳文化を考える上では非常に重要です。日本の古墳は、鍵穴形をした前方後円墳、鍵穴の中でも丸い鍵穴をしたのが前方後円墳、四角い頭をしたのが前方後方墳、丸い形をした円墳、四角い形をした方墳という違いがあります。四つの基本形状は、政治的な派閥とか、出自とかを表すというふうに言われています。一方で、先ほど見ていただいたように古墳は大きさに格差があって、これは墳丘に投入できる労働力を示すので、被葬者の、もしくは後継者の実力を示すものだろうというふうに理解されております（図４）。こういったところを研究する上で、一番大切なのは古墳の大きさを正確に測るということ、そして古墳の形を正確に把握するということになります（図５）。これが、発掘調査で非常に丁寧に古墳の大きさを研究している、一つの大きな理由になるわけです。

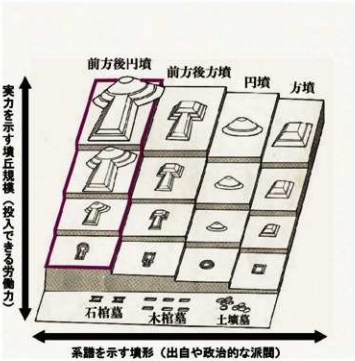


図４　古墳に見られる秩序ある多様性

実際、世界各地の墳丘墓を見ていくと、大きさを聞いても「大きさは大体これぐらいだ」とか、形状についても「もともとの形はどうだったんですか」ということを聞いても、日本ほど正確に答えられる国が、地域が、あまりないということもわかってきました。日本で、墳丘の調査にこだわりを持って研究をしてきたというのは、それだけ墳丘に意味があったということにもなるかな、と考えています。

図５　古墳の形を正しく測る

次に、関西を出て各地域の古墳を見て参りましょう。５世紀は各地域に大きな古墳が築造された時期でして、南の方に行きますと、鹿児島県の横瀬（よこせ）古墳、全長 129 メートルの

図６　横瀬古墳（鹿児島県）

図７　角塚古墳（岩手県）

非常に大きな古墳です（図６）。古市古墳群や百舌鳥古墳群でも出土している、大阪の陶邑窯跡群で作られた須恵器が出土しています。もちろん、南九州独自の埴輪も出土している古墳になります。北は、全長43メートルの角塚古墳が岩手県にあります（図７）。積雪した角塚古墳を私もぜひ見たいというふうに思って、長靴を履いて角塚古墳に行ってきました。南北で言いますと、直線距離にして1300キロメートル離れても前方後円墳が築かれている。こういうことも、日本の古墳の特徴になります。例えば、他の国ですと、王様の墓とか、有力な貴族の墓というのは、都の周りに集中して築かれていたりとか、そういった墓を形成する地域が限定されていたりするのですが、日本列島の場合は非常に広い地域に、各地域の有力者が共通の形を採用したということは、これもまた日本の古墳文化を考える上で、特徴的なこととなります。こういったあり方が、東アジア世界の中で同じなのか、それとも異なるのか、ということが次に疑問として上がってくるわけです。

そこで日本列島を飛び出して、まず朝鮮半島に目を向けていきましょう。古墳時代に併行する時代は、朝鮮半島では三国時代と言います。三国時代にどういうふうなお墓造りをしていたのか、ということを見ていきたいと思います。今回の資料は、私が現地に訪れた古墳や墳丘墓を中心に紹介しています。三国時代を代表する墳墓としては、高句麗の将軍塚、太王陵がありますが、割愛します。新羅や百済、そして加耶といった政治勢力の墳墓を見ていきましょう。

まず朝鮮半島南東にあった加耶諸国です。日本と非常に結びつきが強い政治勢力です。加耶を代表する大成洞古墳群、実は墳丘がないのです（図８）。わずかにはあったと思われるのですが、独立丘陵の上をそのまま掘り

図８　大成洞古墳群（大韓民国）

図９　筒形銅器（福泉洞古墳群出土）

込んで埋葬施設を構築しています。墳丘部分のみに注目すると日本と全く違うのですが、例えば筒形銅器というものが副葬されています。これはヤリや鉾の石突の部分に取り付けられたというふうに考えられています。例えば、羽曳野市の庭鳥塚古墳から出土しています。同じものが、この写真に挙げている大成洞古墳群、福泉洞古墳群から出土しています（図9）。よく似たものを副葬しているのですが、お墓の造り方というのは、全く違うということがわかってきます。

図10　昌寧　校洞古墳群（大韓民国）

次に校洞古墳群は円丘の墳丘墓を築造しており、写真を見ると日本の古墳とよく似ているように見えます（図10）。

さらに新羅には、皇南大塚や天馬塚など、巨大な墳丘墓が築かれました。皇南大塚を写真で表しています（図11）。一見すると、よく似ているように思うのですが、何が違うかということですね。朝鮮半島三国時代、特に加耶や新羅の地域で造られた墳丘墓は、埋葬施設をまず造って、その後に墳丘を盛るということをします。これは墳丘が後に来るので、墳丘後行型というふうに呼ばれているものです。

図11　新羅　皇南大塚（大韓民国）

日本の場合は、地面があって、もしくは地形を掘削して形を造って、まず先に墳丘を造って、その過程の中で埋葬施設を造って、もしくは墳丘を造った後に埋葬施設を掘り込んで造るということになります。朝鮮半島と日本列島とでは、墳丘の築造方法が、前後で異なっている。日本の場合は、基本的には墳丘先行型になるということになります。同じような墳丘があっても、その順序が違うということになります。

皇南大塚は、さらに見ていただくと墳丘をこうやって盛っているんですけども、日本の古墳研究者が見ると、少し違和感があるところがあります。何かというと、日本の古墳は、墳丘頂上に平らな面を設けて、そこで盛大に葬送儀礼を行うということになります。一方で、皇南大塚を見ると、この墳丘が完成したときには、王はもう埋葬されているわけです。葬送儀礼が先にあるということです。その後に、こういうふうに大きな墳丘を盛っています。墳丘上に、儀礼をするようなスペースを設けたりということをしていないとい

うことになります。

百済の墳墓を見ていきましょう。百済王陵は、石村洞古墳群です（図 12）。多くの日本の古墳と違って、積石を基調としているという点が大きく違ってくる、ということになります（積石墓は、香川県などにありますので、日本で全くないわけではありません）。

図 12　百済　石村洞古墳群（大韓民国）

次に武寧王陵について取り上げます。高槻市にある今城塚古墳は、考古学者はそこを真の継体大王の墓であろうというふうに考えているのですが、被葬者である継体大王の、国際政治社会におけるパートナーになった王が、百済の武寧王です。写真で見ていただきますと、石室の写真になるわけですけれども、その入口になります（図 13）。日本の今城塚古墳と比べると、非常に墳丘が小さいです。三国時代と古墳時代では、墳丘に対する考え方の重みが違うということが、こういったことを見るとよくわかってくると思う写真なので、ここで取り上げさせていただきました。

図 13　百済　武寧王陵（宋山里古墳群）

次が、朝鮮半島の中でも、南西海岸のところに栄山江流域という地域があります（図 14）。大阪平野では、5 世紀代に朝鮮半島から移住してきた渡来人が住んだ集落跡が見つかっています。その故郷の一番の有力候補が、この栄山江流域という地域です。ここでも墳丘墓が発掘されています。実は、この地域には前方後円形の古墳が、6 世紀前半代を中心に築造されています。この被葬者が、日本列島に非常に関係が深い人なのか、それともこの地域の栄山江流域の人が前方後円墳を採用したのか、百済中央との関わりはどういうふうにあったのか、というのが非常に議論になっています。私は、いろんな要素が、前方後円形の古墳に、日本列島の九州に系譜を持つようなルーツもありますし、近畿にルーツがあるようなものもありますし、もちろん在地にルーツを持つようなものもあります。こういったことから、やはり各地域の、いろんな交流があったような人たちが被葬者としてふさわしいんじゃないかな、と考えています。その人の出身地は、とか、血縁はどうなっているのか、というふうに聞かれると、やはり骨できちっと分析する必要があるだろうというふうに考えているところです。

このように朝鮮半島各地の墳丘墓を見て参りますと、日本列島のように非常に広い地域に、同じような形の、もしくは同じように墳丘の大きさによってランキングを設けるとい

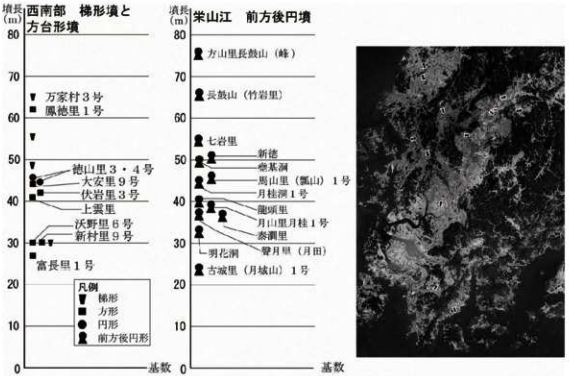


図 14　栄山江流域の墳丘墓と前方後円形系墳

ったような、共通したあり方が見られるかというと、そういうわけではありません。各政治勢力やさらに細かな地域でそれぞれの墳丘の築造方法があったり、そのルールが異なっていたり、そういうことが見て取れます。従いまして、東アジア世界の中でも、日本の古墳文化というのは、非常に特徴的だということがわかってくるわけであります。

同時期の中国の墳墓については、さらに様相が異なってくるところであります。ここで、少し前の時代も含めて東アジアの墳墓のことを考えたいと思います。

まず取り上げたいのは、秦の始皇帝陵（しん の し こうていりょう）です。これ、今写真でご覧いただいているのが秦の始皇帝陵の墳丘本体です（図 15）。

漢の時代の陵墓も見ていきましょう。この写真は、前漢の武帝の陵墓になります（図 16）。茂陵（もりょう）と言います。山のような墳丘が武帝の墓になるわけです。ここで非常に興味

図 15　秦始皇帝陵（中華人民共和国）

図 16　前漢武帝茂陵（中華人民共和国）

深いのは、中国の場合、文献で、皇帝に仕えた側近たち、将軍たちが明瞭でして、しかもそれが墳丘墓として現存しているというところがあります。みなさんから見ていただいて右手に映っているのが、武帝に仕えた霍去病（かくきょへい）という人物のお墓になります（図 17）。茂陵と陪冢（ばいちょう）（陪塚）である霍去病墓は、陵園の中で配置が比較的明瞭に把握できます（図 18）。皇帝に仕えた側近たちの墳墓が、こういうふうに同じお墓が造られているエリアの中に、うまくレイアウトされているという構造が漢の時代にあります。

図 17　霍去病墓（中華人民共和国）

図 18　中国前漢武帝茂陵と陵園

こういったあり方というのは、実は百舌鳥・古市古墳群でも見て取ることができます。前方後円墳の周りに陪冢を従えている古墳であるとか、大・中・小の古墳が展開しているということが、古市古墳群、百舌鳥古墳群の一つの特徴になると思います。例えば、野中（のなか）古墳という、藤井寺市にある古墳は、小さな古墳でありますけれども、ここから 11 セットの鉄の甲（よろい）と冑（かぶと）、それが出土したものです（図 19）。これは陪冢という古墳ですけれども、その当時の大王や王族に仕えた側近の墓であろう、というふうに私は考えております。政治的な身分であるとか、役職、これを古墳として表す、古墳として人物の死後も社会や政治的記念物として記憶させていくあり方は、実は中国古代のあり方とよく似ているんじゃないかな、と思います。私が今進めている古墳時代の研究の一つの内容になります。ただ、アジアの中でも、さまざまな共通点が見える部分と、そもそもの墓造りの中で相違点がある部分というのがあります。

図 19　野中古墳出土甲冑

次は、アジアから出て、ヨーロッパのほうの墳墓を見ていただきたいと思います。ヨーロッパの墓で、まずフランスに行きましょう。世界各地で、100 メートルとか 200 メートルを超えるような、墳丘墓を見に出かけて行きました。日本にいると、400 メートルを超える、例えば誉田御廟山古墳ですとか、200 メートルを超える墓山（はかやま）古墳とか、そういうのがあって、もう 200

メートルとか 100 メートル台ぐらいですと、日本の古墳時代を研究していると、そんなに言うほど珍しくはないな、とも思うわけです。もちろん大規模な古墳であり、重要な部分ではあるのですが、トップではないなというふうに感じます。しかし、日本列島を飛び出して世界各地のお墓を見に行くと、100 メートルを超えてくるようなお墓というのは、ほとんどありません。実は、朝鮮半島の墳墓の中でも、中国の皇帝や貴族層であっても、100 メートルを超えてくるような墳墓を築いた人というのは、なかなか見当たらないのです。

図 20　バルヌネズ墳墓（フランス）

図 21　サン・ミッシェル墳墓（フランス）

その中で、ヨーロッパのフランスに非常に大きい墳墓があるということで見に行って参りました。バルヌネズ墳墓という積石墓で、紀元前 3000 年から 4000 年の墳墓になります（図 20）。今から 5000 年も昔にこんなに大きな、石を積んだ墳墓があるんだと勉強なったんですけども、現地の考古学者に聞くと、この墳墓というのは一回の築造で完成したというわけではないんですね。1000 年を超えて、最終形態がこういう形になった、と伺いました。日本の古墳は、一人ないしは複数人のために、大きな墳丘を築くわけですけれども、ヨーロッパ新石器時代の場合はそうではない。1000 年かけた結果であるということです。同じ時代、100 メートル級のサン・ミッシェル墳墓も紹介します（図 21）。上にキリスト教の教会がありますが、墳墓そのものも非常に大きなもので、中は通路になっていて、日本で言う横穴式石室のような埋葬施設がある墳丘墓になります。これも積石墳丘が一度に造られて、それで複数の埋葬施設が設けられた。造墓造築を続けていく中で、最終形態がこうなったということになります。

さらにイギリスにも行きましょう。イギリスには、同じく新石器時代にウェストケネット墳丘墓というお墓があります（図 22）。全長約 76 メートルある墳丘墓です。埋葬施

図 22　ウェストケネット墳丘墓（イギリス）

設は大きな石を積んで構築し、日本で言うところの横穴式石室のようなものです。石室の内部からたくさんの人骨が出てきている、そういう墳墓です。この墳丘墓も、一人のため、ないしはごくごく限られた数人のための墳墓というわけでは全くありません。大人数の、長期的な埋葬の地だったということがわかっています。

このように見て参りますと、日本の古墳築造との違いがよくわかります。百舌鳥古墳群の大仙陵古墳、考古学界のほうでは、仁徳天皇陵古墳のことを大山古墳であるとか、大仙陵古墳とか、そういうふうに呼ぶわけですけども、大仙陵古墳は15年8ヶ月かかったということが、試算で出ています（https://www.obayashi.co.jp/kikan_obayashi/detail/kikan_20_idea.html）。「長いな」と思います。大学1年生で巨大な古墳築造に関わると、古墳が完成すると私ぐらいの年齢になるという、そういう年月になります。日本の古墳を勉強していると、「長いな」というふうに思うんですけども、ヨーロッパ先史時代のように1000年を超えるとなってくると、平安京を造り始めてから現代になっても、まだ埋葬を続けているという、そういうふうな感覚になります。とてつもなく長期にわたって墳墓を使い続けるという、そういう文化が世界にはある、ということに気づかされました。新石器時代は、農耕社会が広がった、そういった時代です。古墳が造られたような時代は鉄器時代で、階層差が顕著で社会が非常に複雑化した段階です。新石器時代の墳墓と日本の古墳時代を比較するのは、あまり適切じゃないんじゃないかという、そういう意見もあるかもしれません。

それで、ドイツの鉄器時代の墳墓にも行って参りました。これはマグダレーネンベルグ墳丘墓で、ヨーロッパの中で最大規模の墳丘墓になります（図23）。実は、もともと墳丘がどれほどの大きさであったのかということはわかりません。さきに見た朝鮮半島の墳丘墓と同様に墳丘後行型です。最終形態として墳丘が築造されるということになります。ドイツのホーミッシェル墳丘墓も、鉄器時代の墳丘墓です（図24）。埋葬施設が確認されています。

図23　マグダレーネンベルグ墳丘墓（ドイツ）

図24　ホーミッシェル墳丘墓（ドイツ）

ヨーロッパの鉄器時代墳丘墓と日本の古墳では、発掘調査の過程が大きく違うことになります。日本の発掘調査では、まず墳丘の大きさを確定します。墳丘の大きさはどれぐらいか、墳丘の部分、部分に最小限の調査区を開けて、「この古墳の前方部の開き具合はこうなのか」、「もうちょっとまっすぐなのか」とか、「どれぐらいの角度なのか」とか、そういうことをしっかり確定します。その上で、埋葬施設

の調査のときには、レーダー探査や電気探査をしながら、慎重に慎重に掘り下げます。それで、墳丘はもともとこういう形だったということをしっかりと研究します。一方、ヨーロッパの鉄器時代墳丘墓の場合、埋葬施設は墳丘の下にあるわけですね。それを発掘しようと思うと、墳丘を結構大きく取り除かなければ下のところまでは到達できない。過去の調査では、この墳丘の形態や形状を十分に調査されないままに埋葬施設の調査がされたという事例もあります。そうすると、一度掘り上げてしまった土を元通りにするというのは、ほぼ不可能です。墳丘の正確な形がかつてどうあったのかということを実証するというのは、非常に難しいということになります。日本の古墳研究のあり方、墳丘に力を注いで研究しているというのは、埋葬施設の構築方法の手順の違いが関係しているということも、こういった事例を見るとわかってきたわけです。

最後に、アメリカ大陸の方の墳丘墓を見に行こうということで、見に行きました。全長 300 メートル近くあるカホキア遺跡の墳丘です（図 25）。これはアメリカのネイティブアメリカンの遺跡です。世界遺産の遺跡です（Cahokia Mounds State Historic Site）。発掘調査によって、マウンドには大きな建物が建っていたということがわかっているんですけども、これは実際墳丘墓かどうかわかってない、そういった遺跡です。こういったものが墳丘墓かどうかというのは将来の調査にゆだねられている、と言っても過言ではありません。これがどういった遺跡なのかというのが、アメリカの学者たちが非常に関心を持っていることになります。

図 25　カホキア遺跡 マンクス・マウンド
（アメリカ合衆国）

さて、もう時間が参りましたので、まとめていきたいというふうに思います。世界各地のお墓参りと言いますか、墳丘墓の比較をしていきますと、やはり日本の古墳というのは、非常に特徴的なものだということがわかって参りました。

一つは、ヨーロッパなどと比較すると、築造と埋葬行為が比較的短期間であるということになります。おおよそ一、二世代におさまるということになります。1000 年を超えてとか、数百年を超えて、墳丘墓を造り続けるといった性格のものではないということですね。

また、基本的に墳丘が先に築造されるということです、これは調査の特徴として、墳丘を非常に丁寧に調査しているということと関係すると思います。そして何よりも、墳丘そのものが儀礼空間としての意味を持っているということです。それは、被葬者の後継者にその権力を譲るような儀礼が行われた舞台であるということです。これは墳丘を埋葬施設

構築の後で造っているような社会では、あまり考えられないようなものになります。

そして、そうした墳丘を古墳時代社会というのは統治の手段として用いられたのではないかということ、墳丘そのものが非常に政治性を帯びているということです。これは大阪大学の福永伸哉先生が最近強調されていることです。

また、古墳を取り巻く環境は、写真を見ていただくと意外と周りが都市化してない、ということにお気づきになった方もおられるかもしれません。古市古墳群の場合でありますと、周囲が市街地と密接しているところにある。これは、開発の危機が迫っているということでもあります。

世界各地の石で積まれた墳墓とか、あとは芝生で覆われている墳丘墓などを見てきたかと思います。しかし、日本の陵墓などは樹木に覆われているという問題もあります。台風等での倒木などによって、墳丘が壊れないように配慮する必要があります。また、周濠が意外と世界各地の墳丘墓には見えなかったと思うんですね。墳丘の周りを水で湛えているというのも、日本の大規模な古墳の特徴となります。周濠の水質なども注意する必要があります。こういった観点から、やはり精密な墳丘の測量図、現時点での、どういった大きさで、どういった形をしているのか、というのを把握する必要というのは、やはりあるだろうということになります。

最後に、こういった墳丘というのは、日本の場合も、世界各地の場合も、実はさまざまな伝承がある、ということもわかってきています。そういったことを考えると、こういった古墳や墳丘墓は常にその地域の社会と密接に関係があった、ということも実はわかってきております。今後どうあるべきか、ということなどを含めて、それは後のパネルディスカッションのほうでお話ができればというふうに思いますので、ひとまず私の見えてきた百舌鳥・古市古墳群、もしくは日本の古墳の、歴史的、文化的意義に関するお話は、ここで終了させていただきたいと思います。ご清聴いただき、どうもありがとうございました。

【参考文献】

国立歴史民俗博物館（編）2018『世界の眼でみる古墳文化』

高橋照彦・中久保辰夫（編）2014『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学大学院文学研究科

福永伸哉 2019「日本の古墳と世界の墳丘墓」『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』（課題番号：15H01900）平成 27 年～30 年度科学研究費助成事業　基盤研究（A）（一般）研究成果報告書　福永伸哉・上田直弥編　大阪大学大学院文学研究科

Knopf, T., Steinhaus, W., & Fukunaga, S. (Eds.). (2018). *Burial mounds in Europe and Japan: Comparative and Contextual Perspectives*. Archaeopress.

世界の土製建造物より考える百舌鳥・古市古墳群の保存と復元

筑波大学 人間総合科学学術院 世界遺産学学位プログラム 准教授　下田 一太

皆さん、こんにちは。筑波大学より参りました下田です。ご紹介いただきましたように文化庁に２年前まで勤めておりまして、その際にこの百舌鳥・古市古墳群の世界遺産申請に関わる仕事のお手伝いをさせていただきました。

それで、久しぶりに東京のほうから参りまして、電車で朝やってきたんですけども、電車の車窓で古墳が見えてきたときに、「おおっ、またやってきたなあ」ということで、すごくわくわくして、駅に降り立ちました。それからたくさんの方が、チラシを持って「こっちです」ということで案内されていて、本当に世界遺産になって地域の方々が、一致団結していろんなことに取り組まれていらっしゃるんだな、ということを見まして、本当にうれしく思いました。

私は、古墳そのものは専門ではないんですけれども、そういった以前手伝いをしたということがありましたので、この場にお呼びいただいたという次第です。あまり聞きなれない言葉かと思いますけれども、土製建造物、土で作った建造物という観点で、古墳を今後どういうふうにして保存し活用していくのか、短時間ですけれど、そういったことについて考えていきたいと思います。

２年ちょっと前になりますが、アゼルバイジャンというところで世界遺産委員会が開かれまして、百舌鳥・古市古墳群が世界遺産に登録されました（図１）。ちょうどこの施設でパブリックビューイングもあって、委員会でチェアマンがカーンと木槌（きづち）を打って登録となったわけなんですけども、歓喜の瞬間をご一緒していたのかと思います。このときの木槌の音は、今でもよく記憶に残っているところです（図２）。

図１　第 43 回世界遺産委員会
（アゼルバイジャン バクー）

図２　世界遺産登録決定の瞬間
（山田滝雄ユネスコ日本政府代表部全権大使と吉村洋文大阪府知事）

世界遺産に登録されるのと合わせて、世界遺産委員会、あるいは国際的な専門家からは、今後こういうふうことに注意しましょう、こうしたほうがいいです

よ、こうしたことに気をつけてこれから取り組んでください、といった、いくつかの勧告が示されます。百舌鳥・古市古墳群の場合には８つの勧告が示されました（図３）。そのうちの一つが、史跡に指定されている構成資産について、保全上の目的及び OUV（顕著な普遍的価値）の保護と整合する、整備の計画を策定しなさいという内容でした。ご存知のように、この百舌鳥・古市古墳群の半分ぐらいは陵墓で宮内庁が管理されており、残り半分ぐらいが文化財として史跡に指定されて利用されているわけですね。文化財は文化財保護法に基づいて保存して、かつ活用することが目的とされています。ですので、保存とあわせて活用することも求められており、それを前提にいろいろな計画がこれまで策定されてきたわけですね。この世界遺産登録時の勧告では、世界遺産の価値に則った活用をしなさいよ、ということを示されたのです。日本での以前の活用といえば公開するということがその内容でしたが、最近では、もっとまちづくりに資するものとか、経済効果がある利用、あるいは観光の資源としてなど、いろいろに活用の方法と手段が広がってきている。そういった中で、世界遺産の価値にふさわしい活用をしてください、ということが示されたことになります。

イコモスと世界遺産委員会による追加的勧告

a) シリアル・プロパティの無形の要素について，文書による記録を継続すること
b) 構成資産 44（訳注：峯ヶ塚古墳）について合意された緩衝地帯の修正を実行すること
c) 史跡に指定されている構成資産について，保全上の目的及び OUV の保護と整合する整備基本計画を策定すること
d) 墳丘の構造上の安定性評価について，将来的な非破壊による観測手法を検討すること
e) 管理体制に対する正式な地域住民の関与の強化について検討すること
f) 緩衝地帯がより広域な周辺環境（broader setting）にどのように関わるか，また，より広域な周辺環境のなかで保護すべきものはあるか，ある場合はその対象について検討し，措置を実施すること
g) 提案されている新たなガイダンス施設（堺市）について，世界遺産に登録されること及び採択される OUV の言明を踏まえ，遺産影響評価を見直し，深めること
h) 公園整備，自転車博物館，大仙公園整備計画，展望台の新規整備若しくは改良，南海電鉄高野線の高架化事業を含めた将来の開発計画について，遺産影響評価を検討，実施すること。また，管理体制や資産の法的保護の枠組みとより直接結びついた遺産影響評価（HIA）手続き等の整備を継続すること

図３　世界遺産委員会による追加的勧告

百舌鳥・古市古墳群の古墳のいくつかはとても巨大で、例えば、応神天皇陵古墳ですとか仁徳天皇陵古墳は、世界でも最大級の古代の土製建造物になりますね。これだけのものを人間が造ったとは、とても人力で造ったとは考えられないな、というふうなことを感じるわけです。だけど、こうして外から眺めるだけでは大きな山のような構造物だ、という以上のことはなかなか理解できない（図４）。

また、先ほど中久保先生からも話がありましたように、古墳の重要な特徴は非常に精緻な形状が造られて、その墳丘上には多数の埴輪が並べられて葺石も葺か

図４　東側から見た応神天皇陵古墳（羽曳野市）

れて、非常に美しい姿であり、また大小さまざまな規模と形の古墳が群をなして配置されていた、ということになります。こうした特徴をどのように伝えていけるのか、がすごく重要な課題として示されたことになります。これは、羽曳野市にある西馬塚（にしうまづか）古墳ですね（図５）。住宅内の古墳で、古墳のわきに看板はありますけれども、なかなかこれだけ見てもどんな古墳だったのか理解することは難しいと思います。これは、はざみ山古墳、これも古市エリアですね、これは藤井寺市の古墳ですかね（図６）。これも、やっぱり中はどんな様子だったのか、これ、ちょっと冬ですので木が枯れていて、少し墳丘が見えてこんな感じなんだなってことはわかりますけれども、築造当初の３次元の復元イメージと比べれば、全形はわかりにくいですね。こちらは古室（こむろ）山古墳ですね、すぐ近くですのでよく行かれる古墳かもしれませんが、墳丘上に登れる古墳ですね（図７）。登ってみると、やっぱり前方後円墳というのは、これだけのボリュームがあってこういう形なんだな、ということを体感できます。墳頂から眺めると、その雄大で広域の景色も感じられると思います。

図５　西馬塚古墳（羽曳野市）

図６　はざみ山古墳（藤井寺市）

図７　古室山古墳（藤井寺市）の後円部墳頂からの眺め（西方を望む）

ただ、やっぱり古墳完成当時の姿というのは、感じることが難しい。そのために、往時の姿や配置や意味を理解するためにいろんな工夫がされているかと思います（図８）。近つ飛鳥博物館に行けば大型の模型がありますし、この近くにあるアイセルシュラホールでも展示パネルを見れば当時の様子を想像することができると思います。また堺市博物館や羽曳野市内の施設でも、映像によって当時の古墳の姿を復元したCGを見ることもできます。また最近では、VR用のヘッドギアで復元イメージを見たり、復元された石棺を近くに展示したりですとか、いろんな形で当時の古墳の様子

図８　当時の古墳の姿を理解するための工夫

を伝える工夫がされているかと思います。

日本国内の他の事例では、例えば、奈良ですと平城宮跡には巨大な大極殿や朱雀門、東院庭園が復元されていたり、佐賀に行けば弥生時代の吉野ヶ里遺跡が復元されていますね（図9）。大阪には、ご存知のように大阪城もまた鉄筋コンクリートですけど形が復元されていています。また、今年の世界遺産で新しく登録されました、北海道と北東北にあります縄文遺跡群の中にも、三内丸山遺跡やその他の縄文サイトに多数の復元展示が設置されていますね。これらは発掘調査の結果に基づいて、専門家が検討を重ねて造られたわけです。

図9　日本での整備事例
平城宮跡大極殿（上段左）、平城宮跡東院庭園（上段中央）、平城宮跡遺構展示館（上段右）、吉野ヶ里遺跡（下段左）、大阪城（下段中央）、三内丸山遺跡（下段右）

だけど、本当にそれを世界遺産として登録された建造物でやっていいのかどうか、やるべきなのか、というようなことについて慎重に考えて取り組みなさい、ということをこの勧告では指摘しています。こうした復元をやってはいけないとは、世界遺産委員会でも、海外の専門家も言っているわけではありませんね。だけど、やるとしたら、十分な研究成果の結果に基づいて確かな復元ができて、そして建造された以降のさまざまな歴史的経緯や地域の人々の遺産への想いも踏まえて、国内外の専門家と協議をした上で進めるように、ということが示されているのですね。世界遺産登録されて、世界遺産という立場で、何をすべきか、ということを考える段階になったのですね。

これは群馬県にあります保渡田古墳群ですけども、こういった形で古墳でも復元されている、当時の様子というのを再現している古墳が国内ではあるわけです（図10）。この近くでも、奈良で馬見古墳群ですね、ご存知だと思いますが、そこにナガレ山古墳という復元された古墳があります。ですので、関西でもいくつかの古墳がこういった形で復元されているわけです。例えば、この保渡田古墳群ですと、上で当時の衣装を着て人が並んで葬送の儀礼ですかね。先ほどの話にもありましたように、古墳の上に人が立って、墳丘は儀礼の空間として利用されていたことを、こういったイベントによって非常にわかりやすく伝えています。

図10　保渡田八幡塚古墳（群馬県高崎市）

一方で、ここにありますように、藤井寺市にあります津堂城山古墳には、八幡神社があって、花壇として綺麗に植えられていているところもあります（図 11）。図面を見ますと、墳丘が形を変えられた状況も見られ、中世にはここは防衛施設として使われた痕跡もある。ですので、今見る古墳の姿はこれまで慣れ親しんできた風景・景観もあるし、それからさまざまな歴史を経て蓄積してきたことにも重要な価値があるわけですね。つまり、古墳を復元することで理解できることと、現状を維持することで理解できることとは、違う時もあるのですね。

図 11　津堂城山古墳の現状（藤井寺市）

こうした二つ、あるいは複数の選択肢の中で、どのような方法を選択すればよいのか、ということをまさに私たちは考えていかないといけないのです。ではどうしたらいいのか、答えは見つからないんですけども、そういったことについて幾つかの事例を紹介しながら考えてみたいと思います。

まず土製建造物としての古墳の特徴を確認して、それから世界の土製建造物、土づくりの建物、住居もあれば、記念物もありますが、いくつかの代表例を見ていきます。それからこういった土だからこその劣化と保存対策を見てみます。最後に、人を埋葬する墳墓としての古墳をどのようにしていくのかということを、順番に考えていきたいなと思います（図 12）。

図 12　土製建造物からみた古墳の整備の考え方

これは世界遺産の推薦書です（図 13）。この中で、百舌鳥・古市古墳群の価値が要約されています。

「本資産の古墳に見られる圧倒的な規模の格差や、形式の多様性、大小の古墳が密集した配

図 13　「百舌鳥・古市古墳群－古代日本の墳墓群－」推薦書

置は、この時代の王権の階層化された権力構造を視覚的に示している。」

「列島各地に多数造営された古墳における葬送儀礼は、権力の継承及び中央と地方の勢力の結びつきを確認・強化するためのものだった。」

「こうした高い社会的意義を背景として、墳丘の大きさと美しさが追及された古墳は、土製建造物のたぐいまれな技術的到達点を示すものとなった。」

図 14　古墳の墳丘盛土の工法

土製建造物としての特徴については、先ほどの中久保先生からのお話で、もっとわかりやすい形でお示しになっていただきましたけども、ここでは墳丘というのは非常に形がしっかりと整っていて美しさが追求されていた土づくりの建物だ、ということが示されています。これも推薦書の中に示されている図面ですけども、墳丘の断面図です（図 14）。こういうふうにして何段かに築成がありますけれども、1 回当たり 1.3 メートルぐらいずつの土をつき固めることを繰り返していく当時の築造の様子が、ある古墳からの発掘調査からわかっています。

応神天皇陵古墳の場合では、おおよそ 143 万立方メートルという土量が必要になるのだそうです。ダンプカーにすると、17 万台というボリュームです。もちろん当時はダンプカーはないわけですし、人力でこれをやるということですね。途方もない量の土を運んできた、世界にも稀にみる土製の建造物だ、ということが端的に言えるわけですね。

世界にはさまざまな土製の建造物があります。ユネスコが 2010 年、今から 10 年前に、土で作られた世界遺産というのを全部まとめた資料を作りました。これを見ると、150 の世界遺産が土を利用されたものであることが示されています。大きく分ければ、土で作られた記念物、これはアフリカにある土づくりの墳丘、そして、今でも人が住んでいる住居としての建築に分けられます（図 15）。

土の建築というと、日本は関係なさそうに思われるかもしれませんけれども、実は日本の世界遺産、文化遺産で20件に今年到達したのですけれども、そのうち、10件は先ほどの目録で土製建造物とされています。日本は木造だと思われるかもしれませんけども、民家建築というのは木で骨組み造りますけれども、壁は土ですよね。それから屋根も、例えば、姫路城なんかでも、壁は土で造って、その上に漆喰が塗られているわけですね。それから神社仏閣等の屋根は土を焼いた瓦が葺かれているわけですし、瓦を葺く前には下地として土が利用される。ですので、日本の建造物の多くも、土がなければ成り立たないのですね（図 16）。ということで、木造が主体であるけど、日本の建造物でも土は重要なのです。

図 15　アフリカの土製モニュメントと住居

図 16　土製建造物の諸技術

さて世界を見渡せば、アフリカでのマリ共和国では、これも世界遺産ですが、この巨大なモスクが土で作られています（図 17）。高さ 11 メートルにもなるのですけども、これも中が日干しのレンガを積み上げていて、その表面にさっきの漆喰のように土を塗り上げているんですね。雨がそんな多くないからこれが長持ちするわけですけども、ただそれでもやっぱり雨降らないわけではないという中で、この周辺の地域の人たちが、毎年 1 回お祭りをして、近くの池から泥をたくさん運んできて、壁に塗って修繕するのですね。壁には木材がボコボコと突き出しているんです

図 17　ジェンネの旧市街の大モスク（マリ共和国）

けども、これ意匠的なデザインとしての意味もあるのかもしれませんけども、年１回の修理のときには、これを足場にして上っていくんですね。ですので、地域の人たちが、高度な技術がなくても、毎年こういった建造物を維持管理していくことに寄与して、そういった行為を通じて信仰が継承されていっているのだそうです。

図 18　イングランドのコブハウス（イギリス）

これは、英国の土の住宅です（図 18）。実は、世界の大体３分の１の人は、今も土の建物に住んでいるといわれています。

イギリスのように先進国でも、こういった土づくりの家というのは伝統的に今でも継承されているんですね。この地方には大体６万戸ぐらいあるといわれていますけれども、こういった土の住宅というのは、幾つかの特徴があります。安価であること。土なので、その辺にあるもので使えればタダで持ってくるかもしれません。それから、形。これも非常に面白いユニークな形ですけども、自由に形ができます。それから、比較的あったかいですね、断熱効果がある。ですので、日本でも、土、土壁の家というのは、エアコンをつけて、そのエアコンの消費効率がすごくいいと言われますけども、保温性が高い。同時に乾燥もしない。一定の湿度が保てる。それから、地震にも強い。巨大地震が起きると、壊れます。だけど、そうでない小さな地震であれば、揺れを吸収してくれる。それで、もし大きな地震があって壊れても、また造ればいいということで抵抗しない。でも一定の程度の地震までは耐性がある。もちろん燃えない、火事にならない。さらに、リサイクルもできる。なので、日本でも土壁民家では、土壁は壊した後にその土を寝かせた後に、水やわら等を混ぜてまた使うのですね。

図 19　土製建造物の特徴

ということで、土の建造物というのは、快適であり、専門家がいなくても、みんなが協力すれば造ったり維持管理ができ、材料は簡単に入手ができて、かつ再利用もできて、環境に負荷が少ない（図 19）。ですので、今求められている、SDGs にも、非常に適した材料なのですね。土製というと、貧しい国の、過去の

技術なのかなと思われるかもしれませんけど、もしかしたら最先端の、未来の技術なのかもしれないませんね。

次に、こうした土の建造物はどうして劣化するのか、それに対してどういう処置をすればいいのか、を幾つかの事例を通じてお話します。もちろん、今までお話ししたように、民家であれば劣化したら容易に再生していけば良いのですけど、モニュメントとしての土建造物ではそうはいきませんので、劣化したら修理して保存していかなくてはならないわけですね。

こちらは、パキスタンにあるモヘンジョダロという遺跡ですけれども、紀元前2600年から1800年ごろ、非常に古いインダス文明のものです（図20）。ここでは日干しレンガを積み上げたたくさんの住居や施設が集まって、都市を造っていました。ここには、排水施設も上下水道もあるし、住宅をはじめお風呂場も共同浴場といったさまざまな施設もあって、世界でも最も古い都市的な遺跡の一つだと言われています。発掘調査が少しずつ進んでいるようですが、それでも遺跡全域の大体15%ぐらいしかまだ発掘調査は終わっていないようです。古代都市では発掘調査で遺構が出土しますが、このように遺構を露出させたままだと劣化が進んでいくんですね。見ていただいてわかるように、レン

図 20　モヘンジョダロの考古遺跡（パキスタン）

南アジア文化遺産の世界 トピックス1　世界遺産モヘンジョダロのいま－保護・保全をどうすればよいのか－（上）｜文化遺産の世界 (isan-no-sekai.jp)

図 21　モヘンジョダロの日干しレンガの塩類風化

南アジア文化遺産の世界 トピックス1　世界遺産モヘンジョダロのいま－保護・保全をどうすればよいのか－（上）｜文化遺産の世界 (isan-no-sekai.jp)

図 22　モヘンジョダロの日干しレンガの崩落

図 23　建造物壁体の倒壊防止の支保

ガの表面がどんどんぼろぼろと崩れていくわけです。下の方も白くなっていますけども、塩がふいている（図 21）。塩害、塩類風化と言いますけども、それが主要な原因で崩れていきます（図 22）。このモヘンジョダロの周辺では、耕作地の開墾が盛んに行われています。ダムを造ったり、灌漑施設を造ったり、そうすると地下水がどんどん上がって高くなっていく。ここは乾燥地帯ですので、地上にどんどん水が上がってきて、その地上、地表面から乾燥して、水分が蒸発していくわけですね。水は蒸発できるけど、塩分は蒸発しないで結晶になる。結晶するときの圧力、結晶圧がレンガを壊すのです。

このように支保を加えたり、部分的に劣化したレンガを交換したりする保存処置が実施されたようです（図 23）。上面の劣化が進んできますので、この上面に新しい蒸発面を作るということで、新しいレンガを使ってキャップをして、この部分が劣化するようにするといった対策が講じられているようです。ただそれでも劣化を防ぐことが難しいということで、埋め戻すしかないんじゃないかという意見も強くあるようです。これを埋め戻してしまったら、せっかく発掘調査したのにわからない。どうやって理解してもらえばいいんだろうかという課題もあります。こうした価値の保存と伝達の間でのジレンマがあって議論が続いているようです。

次は中国の事例です。中国にもたくさんの土製の建造物あります。世界遺産シルクロード、絹の道は複数国にまたがってありますが、その一つの中継地である交河故城（こうかこじょう）という一拠点が、構成資産になっています（図 24）。非常に過酷な環境で、暑いときは 50 度、寒いときはマイナス 20 度、とても耐え切れないような環境ですね。川の流れによって岩が浸食されて、高さ 30 メートルぐらいの岩盤が大きく残り、その上に防衛上有利ということで街が造られました。

図 24　交河故城（中華人民共和国）

図 25　交河故城の土製建造物

かつて立ち並んでいた建造物は風化して、過去の壮麗な都市の様子を思い浮かべるばかりです。近く寄っていただきますと、こうやって泥を積み上げた版築した壁であることが良く分かります（図25）。これをよく見ていただくと、水平に線が走っていますので、ここの高さで木枠をして上から突き固めた版築の作業風景が想像されます。

1990 年代に日本の支援が入り、記録や修復工事がされました。この上にもう一回土を塗って保護をしたり、風化した建物の復元の研究に基づいて遺構の復元建造物を作る支援が行われました。現在では、こういった技術がさらに展開して中国政府によって遺跡の保護が進められていると聞きます。

それから、こちらはアンコールというカンボジアにある遺跡です（図 26）。このアンコールワットという寺院は、密林の中に今では位置しています。アンコール遺跡群は砂岩やラテライトという石やレンガで造られています。しかしながら、建物の内部や基礎は土が利用されており、重要な役割を果たしています。

図 26　アンコールワット寺院（カンボジア）

アンコール遺跡群にはたくさんの寺院が残されているのですけれども、こちらはバプーオンという寺院です。1948 年に大雨が降って崩れたときの写真です（図 27）。その表面は石積みですけれども、表面には 2 層ぐらい石積みがあって、その内側が全部土でできている様子がわかりますね。版築という工法で土を突き固めた表面に、化粧のようにして石が覆（おお）っている構造なのです。

図 27　バプーオン寺院の基壇の倒壊

バイヨン寺院

図 28　バイヨン寺院

こちらは、バイヨンという寺院（図 28）の経蔵と呼ばれれる建物です。砂岩材とラテライト材の外装材を解体すると、内部の土の構造が見えます。この建物では石積み、石組みが変形して、さらに崩れてしまう危険性もあるので、解体して再構築することになりました（図 29）。日本政府による国際協力事業です。石を一つずつクレーンで外していくと、基壇の中の構造が確認されます。ここは、東南アジアで雨が非常に多いところです。スコールのように非常に強い雨が降ります。そうすると、雨水が石積みの中に入っていって、雨水が外に流れ出てくわけですが、そのときに一緒に土を流し出してしまうわけですね。そのために、中がどんどん空洞化していく。その結果、石積みが変形していくんですね。石積みが変形すると、さらに多くの雨が入ってきます。このような悪循環がどんどん進んで、基壇の中の土が抜けて崩壊が進んでいく。さらに、木の根が隙間から入って、石材の変形を進めてしまう。そんなことで、このアンコールの遺跡というのは壊れていくわけです。ですので、崩壊の根本的な原因は、基壇の中の土にあるのですね。つまり、土の修理をするというようなことが、修復工事の大きな割合を占めています。こちらの写真は、伝統的な、当時の寺院を造ったときの様子だろうと言われている、浮き彫り、石に彫られた彫刻があるんですけども、そういったものに習って修復工事で版築をしている様子です（図 30）。棒の先に、ちょっと広いところが付いていまして、バタンバタンと土を堅固に突き固めていく。かつての技術を理解し、現代にも活かしていくことが修復工事では目指され

3．土製建造物の劣化と保存処置：アンコール遺跡の場合

日本国政府アンコール遺跡救済 チームによるバイヨン寺院北経蔵の修復

図 29　バイヨン寺院の修復

3．土製建造物の劣化と保存処置：アンコール遺跡の場合

日本国政府アンコール遺跡救済チームによる
バイヨン寺院の修復

図 30　バイヨン寺院の版築による修復

ました。

先ほどのバイヨンという寺院の中央には、高い塔が建っています。高さは35メートルになります。この建物は、当初の地面からは20メートルの高さの基壇上に立っているのです。この中央塔が安定しているのかどうか、ということの調査が行われました。巨大な構造物ですので、基礎は土だけではなく部分的に石積みがあるのではないか、と想定されていました。ところが、基礎のボーリング調査をしましたら、驚いたことに、このオレンジのところが全部、土で、石積みの構造が塔の直下にはないことが判明したのです（図31）。砂上の楼閣という言葉がありますけれども、まさに土の上に、これだけ巨大なものが建って、今でも安定しているということがわかりました。土の構造であっても、雨水だとか水に接しないでしっかりと拘束されていれば、強いということがわかってきたのです。雨水は基壇の中に入らないように遮水され、地下水もここまで上がらないようにデザインされているのです。水の影響を受けず周りをしっかりと拘束している状況が保たれているので、ここは構造計算をすると、コンクリートよりも強い状況であることがわかりました。ですので、土というのは、水には弱いけれども、しっかりと遮水すれば、変形せずに維持できる素材なのですね。

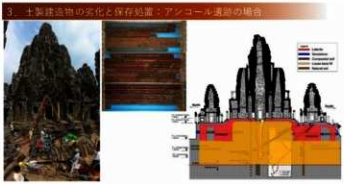


図31　バイヨン寺院の基礎構造

次に、世界遺産である土の建造物が、どのように表現されて整備されているのか、考えてみましょう。先ほど中久保先生からも、中国、韓国の例、いくつかご紹介いただきまし

4．朝鮮半島における世界遺産の墳墓での復元整備

表3-4　東アジアの類似資産の地域及び年代

	東アジア周辺部	中国大陸	朝鮮半島	日本列島
30c BC		□紅山文化の遺跡群		
20c BC	□モンゴル・アルタイ山系の岩絵群	■良渚遺跡群		
3c BC	□モンゴル・アルタイ山系の高原	■秦始皇陵 □シルクロード（前漢皇帝陵）		
3c AD		■古代高句麗の王城と墳墓群	■高句麗墳墓群 ■慶州歴史地域 ■百済歴史地域 □高霊池山洞の大伽耶古墳群 □金海・咸安の伽耶古墳群	□百舌鳥・古市古墳群
7c AD	□吐蕃ヤーロン			
10c-14c AD	□西夏皇帝陵群		■開城の歴史的建造物群と遺跡群	
14c-20c AD	■フエの歴史的建造物群	■明・清朝の皇帝陵墓群	■朝鮮王朝の王陵群	

百舌鳥・古市古墳群 世界遺産推薦書より

図32　東アジアにおける墳墓関連資産の地域及び年代

た。ここでも、ちょっと重なりますけれども、ご紹介したいと思います。これは百舌鳥・古市古墳群の世界遺産の推薦書の一部です（図32）。世界遺産の推薦書は、文化庁のホームページからダウンロードできますので見ていただくと、こんな表が掲載されています。なぜ、百舌鳥・古市古墳群は世界遺産としての価値があるのかということを説明するため、他遺跡との比較分析の表です。比較をして、百舌鳥・古市古墳群にしかない特徴が示されています。その比較の対象というのは、この表に記載されているものです。朝鮮半島のものもあれば、中国のものもあれば、東アジアのものもあれば、もっと広い世界のものもあります。中でも、朝鮮半島、先ほども紹介ありました新羅（しらぎ）、慶州（けいしゅう）、百済（くだら）といった地域の墳丘は非常に似ていますし、時代的にも近く、歴史的関係性もありますので、しっかりと比較分析が行われています。

皇南大塚（南墳）発掘調査報告書（韓国文化財研究所，1994）

図 33　皇南大塚（大韓民国）

皇南大塚（南墳）発掘調査報告書（韓国文化財研究所，1994）

図 34　皇南大塚の発掘調査

皇南大塚（南墳）発掘調査報告書（韓国文化財研究所，1994）

図 35　皇南大塚の墳丘内の発掘調査

そういった韓国にある世界遺産として登録されている墳墓が、どういう形で活用されてるのかというのを、大きく三つの事例から紹介したいと思います。

こちらは、先ほどもご紹介ありました皇南大塚（こうなんたいづか）です（図 33）。たくさん墳墓があって、そのうちの一番大きなものです。長さが 120 メートル、被葬者はわかっていないのですけども、韓国内で一番大きな墳丘の一つです。5 世紀後半で、南側と北側に二つ墳丘が並んでいます。先に南側だけがあって、後から北側が造られたようでして、南側の墳丘は男性が葬られていて、奥さんは北側にということで、夫婦の合葬墓だろうと言われています。1973 年からこんな形で発掘調査がされました（図 34）。墳丘の上から掘り下げられていきました。ちょっと衝撃的な写真ですね。こうやって掘り下げていくと、被葬者が

納められた主体部に到達します。発掘調査ですので、土層がわかるように少し帯を残していますけれども、それを残した上で、こういった墳丘や主体部を造っていた積石が見えていますね（図 35）。そうすると、二つの主体部、被葬者を埋葬していた施設が出てきまして、男性のものと、女性に関する銘が書かれたものが出てきました。未盗掘だったということもありますし、さまざまな出土遺物が出てきました。韓国の考古学や歴史研究資料でも、大変な大発見だったわけです。金製のものですとか、剣ですとか、多くの出土品がありました。これは馬具の鞍の一部ですけども、ちょうど誉田八幡宮（ほんだはちまんぐう）が所蔵されている鞍金具にも似ていますね（図 36）。皇南大塚では発掘調査を終えたら、また埋め戻しをして、以前と同様の墳丘に戻されました。

皇南大塚（南墳）発掘調査 報告書（韓国文化財研究所，1994）

→約4万点の出土遺物の多くは、国立慶州博物館に保管・展示

図 36　皇南大塚出土の鞍金具と誉田八幡宮所蔵の鞍金具

そこから 100 メートルぐらい離れたところに天馬塚（てんまづか）があります（図 37）。ここでは 1973 年、実は皇南大塚より少し前に発掘調査がされました。皇南大塚のほうが大きくて重要なので、その前に予備的な調査をしてみようということで、こちらで先に調査したと言われています。調査の結果、重要な副葬品が多数出てきました。未盗掘であり、一躍有名になったところです。こちらでも調査を墳頂からしていきまして、主体部が出てきたんですね。その後、墳丘内の墓室に展示室が設置されました。報告書などを見ますと、被葬者を納めていた主体部の遺構については、解体をして別のところに移動されたようでして、主体部があ

図 37　天馬塚（大韓民国）

図 38　天馬塚の展示施設

った場所に新しい施設が造られました（図 38）。コンクリート造ですね。ドーム型のものを造って、入口から廊下を通って中に入ると復元された主体部が展示されています。2018 年にはこの展示はリニューアルされまして、主体部は新たな研究成果を盛り込んで復元展示の形状が更新されたようです。それから、墳丘内への導入路は以前は味気ないコンクリートの廊下が、今回の更新によって、現在から発掘調査の 1973 年、それから 5 世紀の当時の様子っていう形で、少しずつ、タイムスリップしていくような演出に変えられたようです。

それから、先ほどもご紹介ありましたけども、百済の武寧王陵（ぶねいおうりょう）です（図 39）。宋山里古墳群の中にいくつか古墳があります。ここは外から見るとそれほど大きくなかったために、発掘調査では発見されてなかったんですけれども、偶然にも発見されて、1971 年に調査が行われました（図 40）。こちらも未盗掘で、さまざまな遺物が出土しました。1997 年までは墳丘内で展示をしていましたけども、その後に閉鎖され、墳丘の近くに展示施設を設けて、そこで展示をするということに変わったようです（図 41）。出土遺物は、近くの国立博物館で展示されています。ちょうど今年が、発掘後 50 周年ということで、公州博物館では、出土遺物を全部一堂に集めて、特別公開がされているようです。

このように、韓国の事例を見ますと、発掘調査の後に、埋め戻しをした

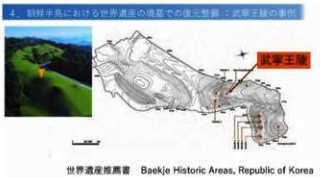


図 39　武寧王陵（大韓民国）

図 40　武寧王陵の墓室の発掘調査

図 41　武寧王陵の墓室のレプリカ・遺物展示

図 42　武寧王陵の整備

ケース、墳丘の中に展示を造ったケース、近くに展示施設を造ったケースと、いくつかの方法があることがわかります（図 42）。

こうした事例も踏まえて、世界遺産となった百舌鳥・古市古墳群の今後の整備について考えてみましょう。基本的には世界遺産としては現状維持していくことが原則となりますが、最初にお見せしたように、やっぱり当時の姿も示して理解を深めていく場にしたいということもあります（図 43）。

図 43　世界遺産としての古墳整備のあり方

それでは、どうすれば良いのか。こちらの図は、保存と活用のための整備としてどのような方法があり、それらの方法はどのくらいの介入の強度として理解されるのか、ということを示したものの試案です（図 44）。

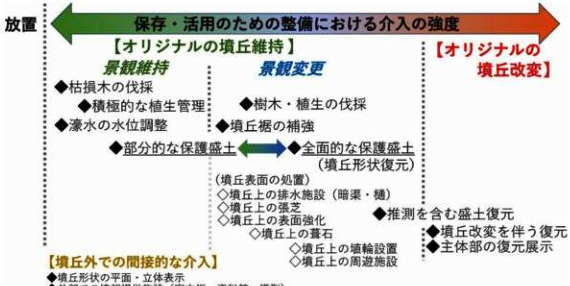


図 44　世界遺産としての古墳の整備における介入の強度（その１）

まず放置というのは、世界遺産であってもなくても不適切ですね。何らかの介入をして維持していくことが目指されるべきです。ただ、オリジナルの墳丘を変えてしまう、発掘調査で出土した墳丘自体に手を加える、これはできません。これらの両極の間にある、多様な選択肢を示しています。

多くの古墳の上には木が生えているわけですけども、その木を切らないで景観を維持するか、木を切って景観を変えるか、そこの間でもグラデーションがいろいろあると思います。

そのまま放置しておくと壊れていくので、やっぱり盛土をするということが手だてとしてありますけども、部分的に盛土をするのか、全面的に盛土をするのか、かつ全面的に盛土をするとしたら、その盛土の形は当時の形に戻してもいいのかどうか、ということで、この間にもグラデーションがあります。

木は枯れてきますので、そういった木を伐採する。あるいは、枝を払ったりとか、間伐したり、そういった処置も必要です（図45）。全部伐採するという選択肢もありますけれども、景観が大きく変わるようなこうした手段が適切か、ということは個別に検討が必要になるでしょう。

あるいは、墳丘の裾は周濠の水によって浸食することもありますので、その対策に墳丘の裾を強化する（図46）。この処置は、残された墳丘を保護するという意味で必要となってきます。

墳丘上では雨水が流れますので、雨の水道ができることがあります（図47）。一回水道ができると、どんどんと削れていってしまう。こういった局所的な浸食を防ぐために、保護の盛土を設けたい。その場合に、浸食部だけにとどめるべきか、全面的にやるべきか。これも個々の墳丘形状の理解や状況に応じて、検討が必要でしょう。

それから、はざみ山古墳、この近くにありますけども、この墳丘の等高線を見ますと、このあたりすごく削れていて非常に急勾配なんですね。このまま放置したら、いつ、ここが崩れるかわからな

図45　植生の管理

図46　濠水の水位調整

図47　墳丘上面の浸食への対策

図48　墳丘表面への保護盛土

図 49　墳丘表面での埴輪や葺石の復元

い。こういった急傾斜には盛土が必要である（図 48）。このように表面への盛土が必要なケースがあるが、盛土上の仕上げはどうしたら良いのか。上に芝を張ったほうがいいのか、薬剤で土の強化処置した方がいいのか、あるいは石を復元的に葺くか、埴輪を並べるということまで許されるのか。そういった多様な表現を伴う選択肢がありますので、どこまでやっていいのか、ということを検証していく必要があります（図 49）。そうした議論の中で、もしも復元的な処置が保存の上で必要で適切だとなった場合には、その復元的な墳丘の形が正しいことを証明するには何がどこまで必要か。

例えば、これは兵庫県にあります五色塚（ごしきづか）古墳ですけども、この古墳の場合は非常に広い範囲を発掘調査しています（図 50）。そのときの写真ですけども、これはすごい光景です。堆積していた土を全面的に剥（ほ）いだ後で

図 50　五色塚古墳の東側クビレ部の発掘調査（兵庫県神戸市）

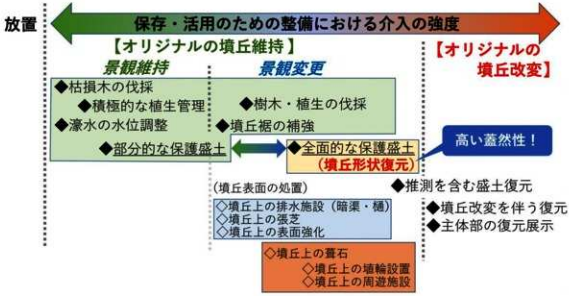


図 51　保存・活用のための整備における介入の強度（その２）

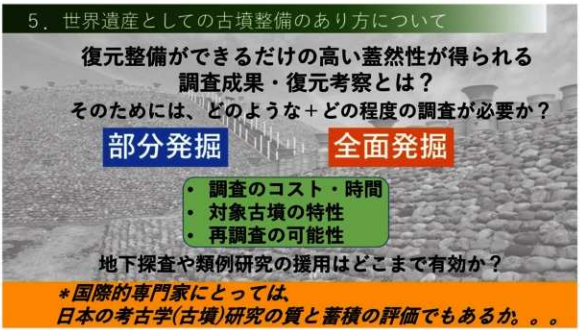


図 52　復元整備ができるだけの高い蓋然性が得られる調査成果・復元考察の諸課題

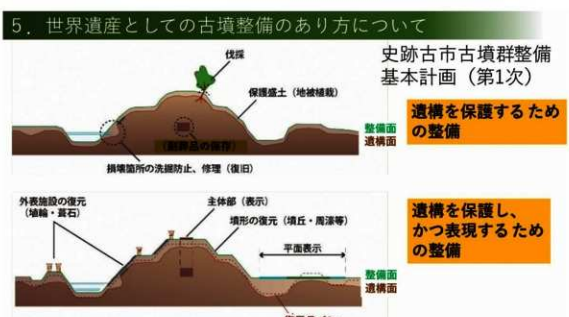


図 53　遺構の保護及び遺構を表現するための整備
（『史跡古市古墳群整備基本計画（第１次）』より）

す。ここまで調査すれば、確かに当時の形はわかるし、この墳丘の場合は大きく変形することなく保存されていたという状況もありました。しかしながら、果たしてここまで発掘調査をしたほうが良いのかどうか。正しい形を証明するために、全面的に把握する必要があるのか。あるいは部分的でもそれがいいのかどうか。もちろん全面やるとしたら、お金もかかるし人手もかかる。それから全部やってしまったら、将来的に調査を行う可能性が

図 54　墳丘外での間接的な介入（墳丘形状の平面・立体表示、外部での情報提供施設、外部での情報提供サービス）

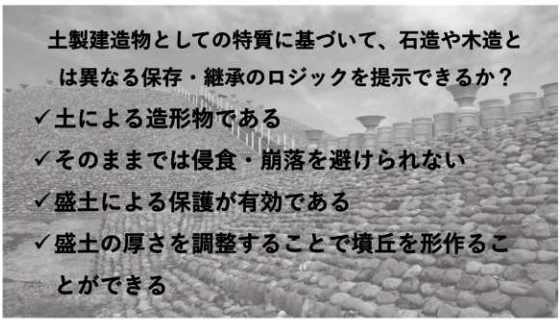


図 55　土製建造物の特質に基づく保存・継承のロジックの提示

なくなってしまう。このように調査の方法についてもさまざまな選択肢があると思うのですが、どの程度の調査を行い、どのような結果であれば復元的介入が適切だと判断するのか、といったことも考えていく必要があるかと思います（図 51・52）。

この会場のすぐ近くには、峯ヶ塚古墳がありますけれども、この峯ヶ塚古墳でも、調査研究が進められて、その成果をもとにどういう形でここを整備していくのか、検討されて

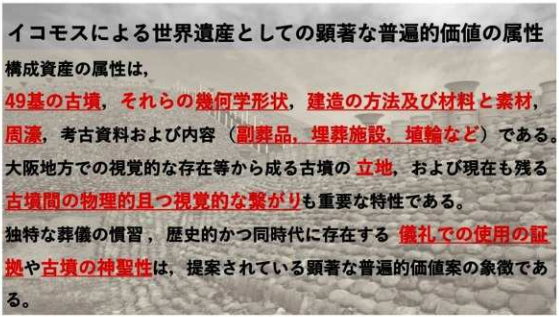


図 56　イコモスによる世界遺産としての顕著な普遍的価値の属性

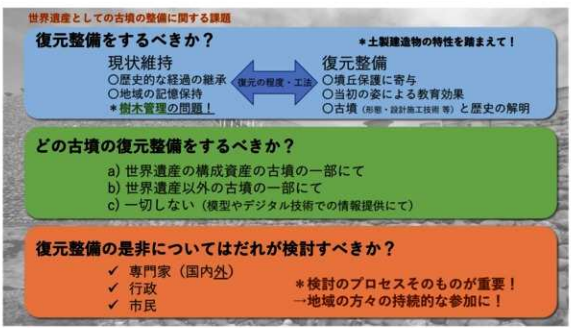


図 57　世界遺産としての古墳の整備に関する課題

いると伺っています。やはり当時の形に戻すのか、そこまではしないのか、戻した場合には葺石を葺くのか、埴輪を設置するのかどうか。そういったことがいろいろと検討されているというところです。

こうした議論は、個々の古墳の中で完結できるものでもありません。シリアルノミネーションとして登録された百舌鳥・古市古墳群では、全体としてどのような整備方針を設定するのか、という前提が求められていることも確かです（図 57）。

百舌鳥・古市古墳群には、49の古墳が世界遺産となりましたが、その古墳の一部では復元的な整備があっても良いのではないかという意見も当然あると思いますし、日本には20万の古墳があるんだから、わざわざ世界遺産の中でこうした整備をしなくても良いのではないかという考え方もあるかもしれません。世界遺産以外の古墳で、積極的に復元的な整備をすれば良いのかもしれません。また、最近だとデジタル技術が利用できるようになりましたので、あえて物理的に復元しなくても、別の手段があるのかもしれません。

もう一つ、復元の整備をするにあたっては誰が決めましょうか、ということも重要だと思います。これまでは、基本的に行政が専門家の意見を聞きながら決めてきました。だけど、この検討するプロセスそのものもやっぱり重要で、皆さん、市民の方が「私はこう思う」という意見をしっかりと検討する場を作って、その意見も踏まえて決定していく、ということがすごく重要だと思います。

それから、世界遺産になった限りは、海外の専門家の意見も聞きながら考えていくことが求められます。

ということで、後半の部分は駆け足になってしまって申し訳ないのですが、世界遺産になったこの百舌鳥・古市古墳群、これからどういう形で保護して利用していくのか、さまざまなことを考えながら取り組んでいく必要があると思います。その中で、皆さんの意見も取り組んでいく場を設けていただけると良いなというところです。どうもご清聴いただきまして、ありがとうございました。

岐路に立つ世界遺産～表面化する矛盾と課題

朝日新聞大阪本社　編集委員　中村俊介

はい。朝日新聞大阪本社の中村といいます。45分ぐらいですかね。よろしくお願いいたします。時間もないのでちょっと少々急ぎ足になるかもしれませんけれども。私は30年ほどでしょうか、朝日新聞というところで、東京、福岡、そして大阪で、点々と移動しながら、歴史あるいは考古学、さらには文化財、そして世界遺産、このようなことを軸に取材をしてきました。東京時代は文化庁とかも担当したことがあるものですから、そういう面もあって、20年ほどですか、世界遺産も見てきました。それで、いろいろと幸いなことに、私が行く先々で世界遺産が推薦され、九州は立て続けに３回、世界遺産委員会、世界各地であるんですけれども、そこにも３度ほど実際に現地で取材させていただきました。

私は研究者ではございません。新聞記者、マスコミの人間なので、むしろ皆さんと同じような、目線で世界遺産をとらえてきました。そういうことをやっていますと、世界遺産、素晴らしい。こっちの古市、百舌鳥、非常に素晴らしい。これもいろんなところで、そのすばらしさは、皆さん、お聞きになっていると思います。でも、取材活動をしておりますと、ちょっといろんな課題が見えてくる。あるいは、もう来年で世界遺産条約も50年、半世紀になろうとしていると、いろんな制度劣化といいましょうかね、矛盾みたいなものが噴き出してきています。そういうものが、とても目につくようになっている。けちをつけるわけではなくて、そういうことに直面すると、そして向き合うということが、さらにいろんな資産、遺産を、公正に、よりよく守られていくことになるんじゃないのかなと思って、あえてですね、今日は、あまり普段、皆さんが見ることのない世界遺産の課題というものを、少しだけ紹介してみようと思います。

これはどこだか、おわかりでしょうか。とても綺麗ですね、山の中ではございません。これはお隣、堺の、いわゆる大山（だいせん）古墳、仁徳陵古墳ですね（図１）。仁徳天皇陵、ご存知のように宮内庁の管理、陵墓ですので、ここに入ることはできません。ところが、今月、先月かな。もう本当にひと月ほど前に、今ここで、新聞ニュースでご存知の方もいらっしゃると思いますけれ

図１　大山古墳（仁徳天皇陵古墳）第１堤より墳丘を臨む

ども、堺市とそれから宮内庁の合同調査がございまして、その結果がプレスにも公開されました。そして私も見ることができました。とても貴重です。普段は、これは、奥は墳丘なんですけれども、この角度では見れないところなんですね。第１堤というところまでしか入れない。ここで調査があったんですけれども、ここから覗くことができました。とても綺麗ですね、やはり人が踏み入れない、立ち入れないので、自然がよく残っているんです。秋の紅葉も綺麗ですし、エメラルドグリーンの濠の水がとても綺麗ですね。

ここで何をやったのかというと、これはトレンチというものを堤上に入れまして、その状況を調べる（図２）。これを見ると、真ん中に、さし示している、これは何かといいますと、これが円筒埴輪というものです。この筒状の土管状の、樽（たる）のような埴輪が、びっしりと列をなして、この堤の上に２列になって、墳丘側、そして墳丘の外側に２列になって、大体、間は30メートルぐらいですかね、並んで走っているんですね。これ全体取り巻くということになりますと、何十万本という世界になると思います。これが円筒埴輪。しかし、上からですから、頭のほうを欠いているわけで、よくわからない。本当に土管なのかなと思いますけれども。

伝・仁徳天皇陵の第１堤で両端に並行する円筒埴輪の列を確認

図２　大山古墳（仁徳天皇陵古墳）第１堤で検出された円筒埴輪

羽曳野市・峯ケ塚古墳発掘調査の現地説明会　２０２１・１２・１０
真ん中に円筒埴輪がほぼ完全な形で。隣は朝顔形埴輪も

図３　峯ヶ塚古墳　墳丘北側クビレ部 造り出し付近の発掘調査

これ、実はちょうどつい１週間か２週間、１週間前ですか。お隣、峯ケ塚（みねがつか）古墳ですね、これも世界遺産の中ですが、峯ヶ塚古墳の現地説明会がありましたので、私もたまたま見に行ったんですけれども、同じ円筒埴輪、これ円筒埴輪ですね（図３）。おそらく、こっちのほうから、造り出しから落ち込んだんじゃないでしょうか。横になっています。さっきのは頭の方、口の方しか見えませんでしたけども、これすごくよくわかりますね。こんな形してたんだ。

同じ世界遺産の中でも、このように見れるところと、そして先ほどの陵墓だから立ち入

れない、なので普段は見れないというところがある。同じ世界遺産なのに、やっぱり不思議だなあと思ったところですが、このように、補完するような形で、円筒埴輪の姿とか、古墳の状況というのは、比較検討してわかる良い例だと思います。

これは、先ほどの元に戻りまして、仁徳陵古墳、このさっきこちらのほうに円筒埴輪の列があったんですけれども、間を調査してみると、びっしりと拳大ぐらいの大きさでしょうか、敷石があるんですね（図4）。これも、また大変な、おそらくこれが、3ヶ所、4ヶ所のトレンチで、全部そういう状況なので、堤上を、こういうびっしりと敷石がめぐっていたと考えられる。これも、また莫大な労働力が課されていたということになりますね。こういうこともわかってくる。

図4　大山古墳（仁徳天皇陵古墳）第1堤表面で検出された敷石

このように、同じ地元の百舌鳥、そして古市の中でも、これに、この特殊性なんですけれども、やはり宮内庁管理の立ち入れない陵墓としての場所がある一方で、誰もが立ち入れるというわけではないんですけれども、比較的見やすいというような、公開されている、あるいは公開されていない古墳が両方共存してるというのが、この百舌鳥・古市古墳群の特徴だと思います。

実は、ここからですけれども、今の話は、ごく最近の例でお話したわけなんですが、皆さん、世界遺産と言いますと、多分こういうものを思い浮かべると思います（図5）。これはドイツのケルンの大聖堂です。これ、私、若き日の私なんですけども、ちょうどこの地下で地下鉄の工事がありまして、ここにはローマ時代のその遺構がたくさん眠っているんですね。オペラの取材で行ったんですけども、ついでにこの文化遺産の取材もしてきました。この巨大なケルンの大聖堂、黒々として、なかなか勇壮ですけども、これも何やら、大気の酸性雨かな、何か煤（すす）がこびりついた結果、黒くなってしまったという、これも気象変動とかにも関

図5　世界各地の世界遺産
富士山（日本）、アンコール遺跡群（カンボジア）、ケルン大聖堂（ドイツ）

係するような話なのかもしれません。

そして、これはアンコール、さきほどの下田さんのお話にあったカンボジアのアンコール遺跡群の、バンテアイ・スレイかな、どの寺院だったかちょっとわかりませんけれども、ここでも一見やっぱり素晴らしいです。素晴らしいけれども、実はよく見てみると、雨で。これ砂岩ですよね、砂岩ですから意外と比較的もろいんですね。経年劣化に加えて塩害。そして、酸性雨とかもよく言われていますね。そして、何よりもここはカンボジアのポルポト派との内戦があった舞台ですので、いたるところに、銃の、戦争の傷跡があります。これも、やはりその遺産を脅かしているような要因です。

これはご存知、富士山、文化遺産ですけれども、富士山は大丈夫だろう…。ところが、やはりここでも多くの人が登るわけなんで、いろいろとオーバーユース、もう人が来すぎるというような、いろんな弊害が起こっているようです。ですから、大なり小なり、やはり危険に脅かされてるということですね。

ごく最近の例を言いましょう、私も行ったところです。これはアフガニスタンの中部にありますバーミヤン（図6）。ここはですね、仏教遺跡です。まず、私はこれ2006年に行ったんですけども、こちらに巨大な38メートル東大仏、これ釈迦仏と言われていますね。そしてこちら、これはさらに大きい55メートルの西大仏、これは弥勒と言われています（図7）。この間に700とか800とか、もう幾つもの石窟がありまして、ここに鮮やかな壁画が描かれていました。いましたが、2001年、21世紀の一番はじめ、最初に、このときに実権を握っていたタリバン、イスラム主義勢力タリバンが破壊してしまいました。ご存知のようにイスラム教は偶像崇拝を嫌いますというか拒みますね。ということで、こういう大仏があるというのは、けしからんということなんでしょう。破壊してしまったわけです、ダイナマイトで。これがこの写真なんですけども、これがありし日の西大仏ですね。足もある。大体作られ

図6　バーミヤン（アフガニスタン）

図7　バーミヤン西大仏

たのが、もう1000年ぐらい経ってますので、7世紀と言ったかな。5世紀か6世紀か、そのくらいですね。ですから、悠久の時間を経過しているので、ある程度やはり壊れますけれども、それでもこのように残っていた。ところが、21世紀のたった1日、一瞬で、1000年残ってきた、この大仏が跡形もなく吹き飛ばされてしまった。イスラムの時代になってもずっと残ってきたわけなので、ある程度、その愛着を持って、イスラム教といえども一緒に共存してきたわけなんですけれども、狭隘（きょうあい）な考え方の犠牲になってしまった。今の状況はこのような状況です。まだ、いっぱい岩が転がっているんですね。これはやはり人災、戦争による被害です。

それで、これはこの中の一つの、バーミヤンの中の洞窟の、石窟の一つなんですけども、ここ、丸く抉られていますね（図8）。これは壁画を切り取った跡です。この切り取られたものが、こちらどこあるか。綺麗な仏様が描いてありますけれども、実はこれ日本の中に入ってきていたんですね。それで、もうお亡くなりになりました、有名な平山郁夫（ひらやまいくお）画伯が、文化財赤十字活動ということをずっとやってらっしゃいまして、この平山さんのもとに救出されたのがこの壁画、これとこれは、ちょうどぴったりと合う。つまり、この壁画も、何も戦争だけではなくて、やはり世の中が混乱すると、これを丸く切り取って、そして闇のルートで国外に流出して、そして高値で取引される、このような、そのお金目的の、闇の流出文化財というのもたくさんあります。

はぎ取られた仏の壁画。本体は日本へ

図8　バーミヤン石窟内壁体の仏教絵画

図9　内戦で破壊された仏像（カーブル博物館）と洞窟内の銃創

これもまたバーミヤンですけれども、こちらは、やはり、足場が組んでいるから、ここは何窟だったかちょっと忘れましたけれども、修復作業中の窟だったと思いますが、この

丸いの、これは当然銃創ですね、大砲なのか機関銃なのかちょっとわかりませんけれども、いたるところに穴がたくさんあいています（図９）。

そしてこちら、実はカブール、僕はシルクロードをやっていたのでカブール、カブールというんですけども、首都のカブール博物館も、内戦の舞台になりました。屋根は落ちて、ほとんどもう機能はしておりませんでした。ただ、残っているところに、これ元の、全部、展示品です。おそらく石造の仏様とかだったと思うんですけども、もうこなごなになって並べられている。これもまた内戦の、犠牲者と言って良いかもしれません。

朝日新聞　2021年9月1日　夕刊　4ページ　大阪本社版

バーミヤン遺跡 よみがえる悪夢

アフガン混乱 修復本格化の矢先に

文化面

図 10　2021 年９月１日付　朝日新聞 大阪本社版
文化面

このバーミヤン、実は 2001 年、タリバンが崩壊した後に、イタリアとドイツとそして日本が修復を申し出て、東京文化財研究所などが中心になって修復活動をやって、それを取材しに行った。2006 年でしたけれども、その後、やはりアフガニスタン、ご存知のよ

図 11　カーブル国立博物館前の石碑
「A NATION STAYS ALIVE WHEN IT'S CULTURE STAYS ALIVE.」

うになかなか安定しない。非常に危険な状態になってきまして、しばらくその修復チームも入れないという状態がずっと続いております。

そういう中で、今年の夏ですね、ついこの間、再びタリバンが実権を握ってしまいました。彼らには彼らの言い分があるのかもしれませんけれども、やはりどうしても私どもの脳裏を横切るのはバーミヤンの大仏の爆破、文化財は大丈夫だろうか。人の命はもちろんですけれども、文化財はまた壊されるんじゃないだろうか、という悪夢がよみがえりました。

それで、かつてバーミヤンの地に立った人間として、このような新聞記事も書いてみたりはしていたんです（図 10）。こう考えてみると、やはりその文化遺産の最大の敵というのは、戦争とか、地域紛争とか、ですよね。先ほどの大仏も 1000 年も生き長らえてきたのが、一瞬で吹き飛ばされてしまう。とても悲しいことです。

これカーブル博物館、この博物館の前に、実はこういう石碑があるんです（図 11）。まだ、今もあるようです。なんて書いてあるか。「A NATION STAYS ALIVE WHEN IT'S CULTURE STAYS ALIVE.」（ア ネイション ステイズ アライブ ウエン イッツ カルチャー ステイズ アライブ）、つまり、文化が生き残れば、その国もまた生き残るよ、というような、本当教訓めいた文言だと思います。まさに、今タリバンもね、昔ほど過激じゃないようですので、大丈夫かなと思っているんですけれども。ぜひ国として、国際社会で認められていたいのならば、こういう文化財、文化を大切にしてもらいたいなと思っております。

このようにですね、今の戦争の一番悲しい部分でしたけども、他にも文化財を危機にさらしている要件というのはたくさんあります（図 12）。例えば、気候変動ですね、もちろん温暖化、そして、それに伴う環境の変化、酸性雨とかですね。あるいは、水面の上昇とかもあると思います。温暖化になれば、小さい南太平洋の国々なんていうのは、いっぱい文化遺産もあるんですけれども、やはりその海面が上がってしまえば、全部それも駄目になっちゃう。これもやはり、気候変動の影響になりますよね。

そして、火災、自然災害、例えば、具体的にはやはり、自然災害といえば、地震ですね、我々としては。そして水害もありますし、台風もあります。これ後で、具体例をお見せしましょう。

それから先ほど言いました、戦争、それから地域紛争。そして、地域コミュニティの崩壊と維持困難、これどういうことなのかというと、遺産を守るっていうのは、やはりその地元の皆さんの愛着の気持ち。その地元の方々が、理解を示してくれないと、遺産というのは守れません。しかし、今、どんどんどんどん過疎化が進んでいますね。そして、地域意識も少なくなってきてるように思います。そうなりますと、当然地元の財産にも愛情もなくなっていく、そういう状況の中で遺産を支えられていけるだろうか、という問題があります。

それからもちろん開発による景観の破壊、それから観光化に伴うオーバーユースや変

質。どういうことかと言うと、先ほどの富士山もそうでしたけれども、私が昔行った、これは自然遺産ですけれども、縄文杉、屋久島の縄文杉ですね、そこもやはり 10 時間かけて往復したんですけれども、世界遺産になると、たくさん人が来ます。ふん尿の問題、トイレも少ない、そして縄文杉、巨大な杉ですけれども、根っこをみんな踏みつける。縄文杉だけではありませんけれども、人が踏むことによって、どんどん木が弱くなっていってしまう。これもやはりオーバーユースの問題ですし、白神山地とかも、入ってくる人たちのその靴とかに本来はない植物の種がついていたりして、生態系が乱されている。これ、八丈島でもそうですね。そういう問題があります。

それから、後で言います、やはり政治的介入とか外交摩擦とか、こういう国家間の、本当に学術以外のですね、問題はたくさんあるんですね。それから、登録件数の増加等に伴う管理の不徹底、新規候補の的確な評価審査の難しさ。なかなか難しそうですけども、今、現在、世界遺産というのは 1154 ですね、1000 件突破してます。そうなりますと、やはり数が多くなればですね、管理もなかなかうまくいかないというところもあります。お金もかかりますよね。その管理の不徹底。

あと、新規物件を登録しようとしても、もうこれだけ多くなると、なかなか、こうローカルな、もう地元の人しかわからないようなですね、物件がたくさん出てきます。そうなりますと、文化遺産を審査する諮問機関は、イコモスというんですけれども、皆さん、専門家です、専門家ですけども、とても全部すべて網羅しているわけではありませんので、なかなかこの価値がわかりづらくなってくる。そういう問題もありそうです。

そして、私、一番大きいと思うのは、この現実社会との条約理念のずれですね。言うまでもありませんけれども、世界遺産条約というのは、人類資産、遺産を後世に渡そうと、これが一番の目的です。ところが、経済、あるいは観光、地域活性化、これ大事、とても

世界遺産を襲う課題の数々

- ■気候変動や温暖化と、それにともなう環境の激変（酸性雨など）
- ■火災・自然災害（地震・水害・台風.....）
- ■戦争・地域紛争
- ■地域コミュニティーの崩壊と維持の困難化
- ■開発などによる景観の破壊
- ■観光化にともなうオーバーユースや変質
- ■政治的介入や外交摩擦など国家間問題の軋轢
- ■登録件数の増加にともなう管理の不徹底、新規候補の的確な評価・審査の難しさ
- ■現実社会と条約理念のずれ

図 12　世界遺産を襲う課題の数々

いいことだと思うんですけれども、それがむしろ後世に手渡すという、本来の目的を凌駕し始めている。そこに、やはりずれが起こってきているわけですね。具体的にはたくさんありますけども、やはり、これは、バランスが必要なんだなとは思います。観光も、観光客が来れば、保護意識は高まりますよね。でもそれを越えすぎて、オーバーユースになってしまうといろいろと難しい面が出てきます。

図 13　ノートルダム大聖堂の火災

２０１９年春、ノートルダム大聖堂（パリ）が火災に！

世界遺産だって被災する

はい。具体例をとって、いくつか言いましょう。最近の例ですね、一昨年、私が大阪に来たのは一昨年なんですけれども、2019 年、パリのノートルダム大聖堂が燃えました（図 13）。行かれた方も多いかもしれません。世界遺産、これはもう、誰が何と言っても、パリに訪れる人は誰でも行くところなんですけども、そのような世界遺産条約に厚く守られていても、燃えるものは燃えてしまう。形があるものが壊れてしまうのは、仕方がないんですけれども、やはり残念なことですね。

２０１９年１０月３１日未明、琉球王朝の象徴、首里城（那覇市）で出火！

図 14　首里城の火災

半年後です。日本でも同じことが起こりました。これは沖縄、那覇の首里城。琉球王国という国が、ありましたね。それまでは日本とはまた違う国が、あそこには、島津の侵攻まで、あるいは明治、廃藩置県の琉球処分まではあったわけなんですけども、この琉球王国の象徴たる首里城が燃えてしまいました（図 14）。炎がありますね。左側も、もう跡形もありません。

もともとどんな形がどんなものが建っていったか。これです（図 15）。朱塗りの、琉球王国の、尚家の王様たちが

住んでいたところなんですが、ご存知の通り、これ自体はですね、再建です。沖縄戦で、もう全部破壊されていますから。ただ、この地下には、遺構が残っています。これが世界遺産なんですね。そうとは言ってもですね、この建物が、皆さんの、琉球の、沖縄の方々のアイデンティティを象徴するものではあったわけなんです。これは朝日新聞のほうに残ってた古い写真ですけども、こういう写真があったから、復元ができたわけなんです（図 16）。これ、余談なんですけどね、これわかりますかね、多分わかりにくいと思いますが、ここに龍の柱があるんですが、実は龍、顔は、こっち、手前を向けてるんですよね。ところがね、さっきの、この龍の顔が、お互いに向かい合ってますね、90 度違うんですね、何でこういう復元にしたのか、ちょっとわからないんですけれども、ひょっとしたら先ほどの写真が発見される前に、この龍の、建て方は、謎だったのかもしれません。はい。これは余談なんですけれども。

図 15　在りし日の首里城

私もですね、これがうちのヘリ飛行機から撮った写真ですけれども、西部本社、福岡に長かったもんですから、一番やはり知ってます。大阪の地からですね、こういう全国面に解説面を書いたことがございます。このようにですね、世界遺産で守られているはずの建物も、時として、火災に遭ったり、破壊されたりするということがあります。

朝日新聞　２０２０年２月１日　朝刊　１ページ　西部本社

１世紀前の姿
首里城鮮明に

本社で写真13枚発見

正殿などが撮けた首里城（那覇市）の火災から31日で３カ月。大正～昭和初期に撮影された正殿などの写真13枚が、朝日新聞大阪本社で見つかった。沖縄の戦前の写真は戦争で焼失したものが多い。城内を行き来する庶民の姿を鮮明に写したものもあり、専門家は「生活になじみ始めた首里城の姿を写しており貴重」と話す。写真は1921（大正10）年に撮影された正殿。当時、首里区立女子工業学校の校舎として使われていて、２階には機織り機のようなものが見える。（伊東龍）▼31面＝戦前の生活も

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法及びに国際条約により保護されています。

図 16　大正から昭和初期の首里城

これも日本の資産ですが、明治日本の産業革命遺産、これは、ちょうど幕末から明治維新後の間ですね、23 の資産が、近世の江戸時代、ある意味、いわゆる鎖国の時代から世界に門戸を開いて、それから近代

図 17　明治日本の産業革命遺産

国家になるという、その遺産をまとめたものです（図17）。

例えば、こういう、この反射炉、鹿児島の反射炉なんですけれども、反射炉というのは、大砲を作るときの製鉄所みたいなものです。かなり鉄を溶かしますから、高温にしなくてはいけない、大量の鉄を溶かしますのでね、そのための施設がいる。これは、もう上物はなくなっていますけれども、これが、おそらく、こういう形が、ものがあったんだろうということですね。これは、萩の、やはり反射炉ですね。そして、こういうレンガ造りの建物、これは、とても昔の歴史遺産だと思いませんよね。でも、このようなポンプ、官営八幡製鉄所のポンプ地かな。建物は、こう丸っこいアールデコっていうのか、アールヌーボーっていうのか、ちょっと古いめかしい感じですけれども、実際にまだ現役で働いている。こういう、いろんなものを23件集めたのが、産業革命遺産なんですが。はい。他にもありますね、これ普通の工場、これは八幡製鉄の工場です（図18）。でも、どうやら日本で一番古い工場らしいです。ちょっと地味で見栄えはしませんけれども、この鉄骨の梁なんていうのは、ドイツから持ってきているのですね。これは何となくわかりますよね。いかにも産業遺産、石炭の施設ですね、赤レンガでこういう櫓が建っています。

これは何か、これは港なんです。三池炭鉱の石炭が積み出された、海の港、港湾施設ですね。これは当然、下から見ると何のことかわかりませんけど、上から見ると、たまたまですけれども、このような鳥のような、ハミングバードといいますけども、ハチドリかな、カワセミかな、そういう鳥の形をしている、とても優美な形で、これも一つの資産になっております。そして、これ、クレーン、これは長崎の三菱重工長崎造船所のクレーンなんですが、巨大ですよね。これ、スクリューです。人が立っているんですけども、豆粒でよく見えないぐらい巨大なものを、実はこれは100年以上前にですね、スコットランドで作られた。今

図 18　カンチレバークレーン、旧八幡製鉄所工場ほか

構成資産のひとつ「軍艦島」
（長崎市）も国史跡、でも……

図 19　「明治日本の産業革命遺産」の「軍艦島」

も稼動しているのは、世界でも少ないと聞いています。120 年ぐらいかな、この巨大クレーンが、いまだに現役で動いている。これもまた、世界遺産の一つ。

そして、一番有名なのがこの「軍艦島」です。軍艦「土佐」に似ているということで、通称「軍艦島」、正式には長崎の端島（はしま）といいますけれども、長崎の沖合に浮かんでいる、浮かんでいるといいますか、島ですね（図 19）。最初はちっちゃい島でした。ここから石炭が出るよということで、労働者が、こう、船で行ったり来たり、毎日毎日やっていたと思います。あまり毎日やるんだったら、ちょっともうここに住み着いちゃえということで、住み着いちゃう。となると、多分、家が必要でしょう。家ができると、やっぱり家族を呼びたいですよね。家族がいると、やはりアパートも必要だし、子どもさんがいれば、学校も必要。そして、娯楽施設も必要。ということで、どんどんどんどん拡張していった人工の島がこの軍艦島です。これは有名ですから、一番産業革命遺産の、よく象徴のように言われます。

実際は、世界遺産になっているのは、この生産施設と、古い護岸の部分だけなんですけれども、それ以外はやはり国の史跡になっていますので、国の史跡、文化財保護法的な文化財と、それから世界遺産一緒になって、守られている、という島なんですが、これだけの巨大なものを、後世に残していけるのか。

崩壊しつつある軍艦島
廃墟をどう残すか

図 20　崩壊しつつある「軍艦島」の建造物

実は、それの手がかりっていうのはまだまだ見つかってないんですね。普段は入れないところなんですが、これは確か、東京理科大と芝浦工業大学との調査の時に、私も同行したものなんですが、これ見てください（図 20）。ボロボロボロとコンクリートが落ちてきますし、釘もいっぱいあります。板も散乱していますし、もう危なくてしょうがない。これを止める術っていうのは、今ないんですね。

こちらは、学校です。学校の一番基礎の部分ですね。当然、周りは海ですね、海なので海水がどんどん入り込んできています。これが基礎、ここ全部海水です。海水で、どんど

ん腐食が進んでいます。もう、もろくなっていっています。やがて、これが壊れたとき、当然、上の、世界遺産の上物の、多分 10 階建てぐらいだったと思いますが、これはね、一番ここの部分なんですけどもね、ここから海水が流れ込んでいる。これ、中学校と小学校が一緒になった建物なんですけれども、この大きな建物もおそらく壊れてしまうでしょう。時間の問題だと思います。

そして、これ、これは日本で一番古い鉄筋コンクリートの建物と言われている、30 号アパートなんですけれども、とても頑丈そうですけれども、実はここ壊れちゃっていますね。さっきのスライドで言いますと、この建物、ここらへんちょっと見えにくいと思いますが、まだ綺麗に整っているんですけれども、今、これ壊れちゃっていると。これは、去年のですね、台風 10 号の台風の強風の直撃を受けまして、壊れてしまった。先ほど、いろんな自然災害の例を出しましたけれども、こういう経年劣化、そして海水とともに、台風とか水害とか、そのような、危険性も常にはらんでいる。しかし、これをそのまま凍結保存して守っていこうという技術はまだ見つかっていません。こんな世界遺産もあるんですね。

経年劣化の自然崩壊は止められるか？
～広島・原爆ドーム

繰り返される保存作業・調査観察
その経緯を記録することの大切さ

図 21　原爆ドームと「原爆ドーム保存工事石碑」

一方で、これは広島の原爆ドームです（図 21）。こちらは、手厚く保存されています。保存工事が定期的に行われています。私がすごいなと思うのは、この建物の前に石碑があるんですね。原爆ドーム保存工事、何年、何年、ちょっと見えませんけれども、平成 2 年、それから平成 15 年、それから平成 28 年と書いてあります。このように、保存の工事を全部記録していっている。この工事を記録するということ自体も、私たちの、その文化資産、世界遺産を守るという一つの記録になっている。これも、また重要な遺産になるんではないのかと思います。

遺産を支える地域社会の衰退
～コルディリェーラ（フィリピン）の棚田の現実

図 22　コルディリェーラの棚田（フィリピン）

あと、ちょっと時間はありますね。全く違うものをお見せしましょう。これは 10 数年ぐらい前に、フィリピンに行きました。フィリピンのマニラから 10 時間ぐらい車で行きますと、すごい田舎の中に、山の中に棚田（たなだ）が、ライステラスです

ね、これがバーって広がるんですね（図 22）。右側、現地では、「天国への階段」と言われているらしいんですけれども、この棚田。私たち主食がお米で、普段田んぼを目にしている日本人にとっては、あまり珍しくないと思うんですけども、やはりパン食とかの欧米系の人たちとか、お米主食以外の人たちから見ると、それはもうすごい田んぼの連なりがあるなと思うらしいんですね。

これはイフガオ族という方々の造った棚田なんですが、実はこの棚田を一つ一つ守っていくには、このように石垣なっていますんで、これをメンテナンスしていかなくちゃならない。これを実際に農家の方々が、毎日毎日、維持をしているんですが、さあ困ったことが起こりましたね。これが危機遺産になってしまいました。なぜか。世界遺産になると、周りにホテルとか、お土産屋さんとか、あるいはレストランとかね、いろんなものができます。それで、農家の後継者たちは、若い人たちが継いでくれるわけなんですけども、これ結構肉体労働ですね、重労働、そしておそらく農家にはそれほど実入りもいいわけではないでしょう。それよりも、やはり周りにできた、ホテルとかね、レストランで働いたほうがお金が儲かるということで、どんどんどんどんそちらのほうに行っちゃった。もともと過疎地ですから、マニラのほうへの流出があったんですけども、それでも、ホテルや観光業が盛況になるにつれて、農家の働き手がいなくなっちゃったんですね。となりますと、こういうメンテナンスをしてくれる人もいなくなっちゃう。耕して、お米を作る人もいなくなっちゃう。棚田というのは、荒れていくばっかしです。

つまり、世界遺産になったがゆえに、存続が危ぶまれていったという、この皮肉な例として、よく私が出すのがこのコルディリェーラのフィリピンの棚田です。実は、危機遺産からもう脱しています。脱した後にどのようになったか、ちょっとわかりませんけれども、あまり変わりがないんじゃないでしょうか。

これはついでですが、私が泊まったホテルでは、夜な夜な、観光客相手に踊りがあります（図 23）。ただ、このようなきらびやかな衣装を着て踊るというのは、おそらく昔は予祝行事とか、あるいは収穫のお祭りとかね、1 年でも限られていただけなんですけれども、観光客相手に毎日見せている。お客さんは喜びますね。ただ、やはりちょっと一歩引いて考えると、これでいいのかなと思っちゃいますね。つまり、お祭りとかそういう行事を、世界遺産という観光化というのが破壊しているところがあるんじゃないでしょうか。

これはお土産屋さん、お土産屋さんにいらっしゃった、そのおばあちゃんたちですが、こういう特別の服を着ていらっしゃ

ハレの日だった祭りの踊りや衣装も今や毎日。
観光化の進行で崩れる伝統風習

図 23　観光化の進行による伝統文化の変容

います。観光客と一緒に写真を写って、小銭をもらうということなんですけれども、特別のときに着る服をこんな感じ。毎日毎日着て、お客様を待っているわけなんですけれども、これもちょっと複雑な気がしますね。なんか、何となく悲しげな顔をされている気がするんですけど、どうでしょうか。

図 24　ウィーン歴史地区（オーストリア）

これは、全く違う例ですね、ウィーンです（図 24）。音楽の都、ウィーン。オーストリアの首都、かつてのハプスブルク家、神聖ローマ帝国の帝都ですね。当然、京都と同じような、古い町並みがあって歴史地区がありますけども、実はこれ、危機遺産になっています。なぜか。ここに、でっかい高層ビルが建つホテルなんですけどもね、計画されてまして、もうどうなんでしょう、今、建ち始めたのかな。これは、この写真はベルヴェデーレ宮というところから、私が写した写真なんですけれども、こちらの、かつて、昔、ベッロットという、カナレットという、そこでは、現地でいいんですがカナレットという画家が何人かいましてね、ベッロットが描いた絵、ちょっと構造は違いますが、これとこれですね、この塔はこの塔でしょう、この塔はちょっと見えてないですね、角度違いますけれども。かつての画家が描いた芸術作品と同じような風景が残っているんですけれども、ここにビルがたくさん建ち始めている。景観が大丈夫かということで、今、危機遺産になりました。

これ、実際にホテルの建設現場のところにかかっていた看板ですが、このようなビルが建つということですね（図 25）。さっきのベルヴェデーレ宮というのはここら辺にありまして、逆に見ているところなんですけれどもね。なるほど、ここから見ると、こういう高層ビルが建つんだなと。ホテル。実は、こちら、こちらはね、ベルヴェデーレ宮の、さっきの展望台みたいなところがありまして、そこに貼ってあった看板なんですけど、一体何かというと、実は景観の問題は非常に複雑で、それを支持する人、開発には必要だ、いやいや、歴史地区を守るためには建てない

図 25　ベルヴェデーレ宮と高層ホテル開発

ほうがいいという人、真っ二つに割れています。

どっちかというと、ウィーン市は、開発を後押ししようというほうが大きかったように思います。ところが、それに対してユネスコが異を唱えたということです。それで問題化して議論になっているわけなんですが、これはベルヴェデーレ宮から、今の看板の拡大なんですけれどね、数字が振ってあります（図 26）。実は建物、近代的な建物に、看板の上に、写真で、数字を振って、こんなにたくさん近代的な建物はすでに建っていますよと。つまり、もうすでにたくさん建っているんだから、もう一本ぐらい建ってもいいんじゃないのかなということを、その開発推進派、これ、市なのかどうなのかちょっとわかりませんけれども、訴えているようです。なかなか、開発というのは難しいですね。開発のバランスをとるということは。どちらが正しいとも言えない。でも、景観悪化で、このウィーンの歴史地区っていうのは、今、世界遺産から危機遺産状態にあります。

図 26　「ウィーン歴史地区」と都市開発

実際に、それが現実になった例があります。これは、イギリスのリバプール、ビートルズで有名なリバプールですね（図 27）。港町です。ここで、太陽の落ちない国かな、大英帝国の海運業を支えた港町で、海商都市リバプールという名前で世界遺産登録だったんですが、今年ですね、今年の蘇州会議で、ついに抹消（まっしょう）されました。世界遺産登録の抹消例というのは３件、これを含めて３件なんですけれども、この３例目が今年ついに、リバプールで、世界遺産は外されてしまいました。

なぜか。やはり景観の問題なんですね。これはビアヘッドといってですね、ネオゴシック建築の、ウォーターフロントの目玉の建物ですが、見てわかりますように、このような超近代的な建物がたくさん建っています。これがまた景観を阻害するということで、このウォーターフロント再開発が、世界遺産抹消の引き金になってしまいました。こっちはアルバートドックかな、横浜にも小樽にも、こういうところはよく見ますよね。

今夏の世界遺産委員会で、英「海商都市」リバプールの抹消
「アラビアオリックス保護区」（オマーン）、
「ドレスデン・エルベ渓谷」（ドイツ）に次ぐ３例目

図 27　大英帝国の海運を支えたリバプール

この都市部の世界遺産の危な

さ、リスクに、こういう景観の問題というのはかなり大きいんですね。ただ、一概にけしからんとも言えないのは、実はこのリバプールという町は有名なんですけれども、人口がかつての最盛期のとき80万人ぐらいいましたが、今はもう50万人切っています。半分近くなっちゃっている。イギリスの中でも、失業率が突出して高いんですね。なので、このリバプールの地元の人たちは、市民は世界遺産の恩恵よりも、やはり再開発のほうが経済的に潤(うるお)うということで、そちらを選んだわけなんですね。いい悪いは言えないんですけども、残念だなという気がします。

ちなみに、ドレスデン・エルベ渓谷、これはドイツ、2例目の抹消例なんですけれども、こちらは川に、エルベ川に橋を通そうという計画がずっとありましてね。ユネスコとしては、この橋を通すと景観が壊れるので、それは思いとどまってくれ。いやいやということで住民投票の結果、世界遺産よりも、その市民の利便性が大事だということで、橋が作られてしまった、それで抹消された例です。

これが、さっき政治の介入の問題を言いましたけれども、2015年、先ほどの産業革命遺産ですね、これを審査した世界遺産委員会がドイツのボンで開かれました。かつての西ドイツの首都ですね、今大学のある、ベートーベンの生まれ故郷です。ここで第39回世界遺産委員会がありまして、産業革命遺産が審査されたんですが、私もここにいました（図28）。

「明治日本の産業革命遺産」で日韓の泥仕合
２０１５年、ドイツでの第３９回世界遺産委員会

図 28　第 39 回世界遺産委員会（ドイツ ボン）

さあ困ったことが起こりました。日韓の泥仕合というものがありましてね。ほほ、産業革命遺産、問題なく登録されるだろうな、というところに来て、日本もそうだったんですが、同じ委員国の韓国が反対をしたんですね、土壇場で反対した。なぜ反対したか。産業革命遺産の中には、先ほど長崎造船所、三菱重工とか、あるいは官営八幡製鉄というのもあると。軍艦島もそうです。そこで、かつて韓国が植民地時代に、そこで自分の国の人々が、強制労働、この強制というのは、そうなのか、

土壇場まで日韓のつばぜりあい
会場外には登録に抗議する韓国市民団体の姿も

図 29　「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産登録をめぐる日韓の衝突

そうじゃないのかというところは難しいところなんですけれども、強制労働をさせられた、そういう施設を登録するのは、けしからん、ということで、韓国が反対しました。実は、それまでに〝手打ち〟はできていたんです。ちょうど、今の総理大臣の岸田さんが外務大臣だったころです。韓国と話をまとめたんですけれども、詰めが甘かったんでしょうね。このユネスコの中で、反対しました。

このように、実はカンファレンスセンター、会場の外では、この韓国の方々が、もうこういう小屋を建てて、反対運動、シュプレヒコールを上げているわけですね（図 29）。おそらくこの方は、後ろに、三菱の、もし三菱の関係者の方がいたら申し訳ないんですけど、あれが見えるので、うん、多分長崎造船場の関係者の方だと思うんですけどもね。私もここで働かされたということなのかどうなのか、とにかく反対しますということで、市民運動の気勢を上げておりました。

ホテルを夜回り朝周り
なんとか登録、やれやれ……

図 30　何とか世界遺産登録にこぎつけた「明治日本の産業革命遺産」の現場のその後…

結局、新規登録の日というのは 3 日間あるんですけども、最初の日に審議の予定だったんですが、大もめにもめて、一番最後に、最終日のぎりぎりになって、何とか登録されました。もし登録されなかったら、これはこれで大きなニュースになったはずです。議長国ドイツのあっせんもありまして、無事登録されたわけですけれども、大変でした。

こちらはもう結構仰々（ぎょうぎょう）しく、当時のユネスコ大使とか、この方は青柳さん、文化庁の長官ですね、とか、長崎の知事の皆さんとか、市長さんとか、内閣の参与とかですね、ずらりとホテルで並んで記者会見をしているところです（図 30）。我々も、もうどうなることやらということで、私一人ではとても太刀打ちできず、応援が来ました。これはソウル支局の記者、ロンドンのヨーロッパ総局の記者、地元ベルリン支局の記者、そして私を含めて 4 人で、毎日、夜討ち朝がけをドイツの地でやって、これはようやく終わって、何とか出稿作業が終わって、やれやれと、ビー

軍事クーデターで混乱収まらないミャンマー古都バガンは大丈夫か

図 31　バガンの寺院群（ミャンマー）

ルを飲もうとしているところです。かなり明るいんですけれども、もう12時ぐらいだと思いますよ。向こうはやっぱり緯度高いですし、サマータイムも実施しているので、結構夜中まで明るいんですね。しかし、もう二度とやりたくないなと。こういう思いでもありました。

図 32　「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」

これもう最後のほうですけれども、これはミャンマーのバガン（図31）。私が行ったときは、この大地に、こういうネギ坊主みたいな寺院がたくさんポンポンポンとあるんですね。それは壮大な景色です。これは朝日です。まだ世界遺産ではありませんでしたけれども、私の行った翌年ぐらいに、世界遺産になりました。でもご存知の通り、今ミャンマーというのは、だいぶ混乱していますね。この政変といいますか、今の状況が、このバガンの遺跡の保護に影響を及ぼさないことを祈るばかりです。

えー、ということでですね、これは後でちょっとお話する機会があるかもしれません。これは、長崎と天草の潜伏キリシタン遺産ですけれども（図32）。ここでも、ちょっといろいろ問題がありましてね、これは大体、今日、皆さんお持ちになっているレジメの中に、私が書いた文章の中にもあります。これ、大体今のスライドというのは、それに従ってお見せしたものですので、後で読んでいただければと思います。この潜伏キリシタン遺産にどんな問題があったのかということも触れておりますので、見ていただければと思います。

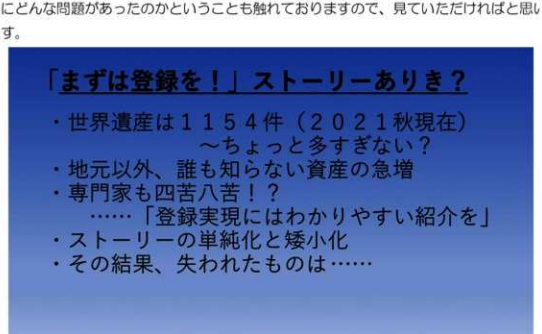


図 33　岐路に立つ世界遺産

ちょうど時間になりましたので、これはちょっとした宣伝なんですけども、一昨年、私が出した岩波新書の中に、もうちょっと知りたいなと思う方は、詳しく書いておりますので、どうぞ（図 34）。

このようにユネスコの条約で守られている、厚く厚く守られているはずの世界遺産も、数々のリスクを抱えている。そして、それを守るためには、私たち、それを支える市民の力というのが、これから本当に必要になってくるということを、その一端を、いくつか紹介することでお話をさせていただきました。どうもありがとうございました。

中村俊介著

『世界遺産
理想と現実のはざまで』
（岩波新書、２０１９）

図 34　中村俊介 2019『世界遺産－理想と現実のはざまで』岩波新書

【参考文献】

中村俊介『世界遺産が消えていく』（2006 年、千倉書房）
中村俊介『世界遺産－理想と現実のはざまで』（2019 年、岩波新書）
中村俊介『「文化財」から「世界遺産」へ－考古学ジャーナリズムの視点』（2022 年、雄山閣）

パネルディスカッション
世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」を守り、活かし、そして未来へ

パネラー：中久保 辰夫、下田 一太、中村 俊介
進　　行：伊藤 聖浩（羽曳野市教育委員会 世界遺産・文化財総合管理室 文化財課）

（伊藤）

皆さん、今日はとても寒い日となりましたが、たくさん来ていただきまして、本当にありがとうございます。私は、羽曳野市教育委員会 世界遺産・文化財総合管理室 文化財課の伊藤聖浩です。どうぞよろしくお願い申し上げます。今日の 3 人の先生方の講演は、いかがだったでしょうか。本当に盛りだくさんの内容で、私はお腹いっぱいになってしまいました。

パネルディスカッション「世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」を守り、活かし、そして未来へ」

それでは 3 人の講師の先生方のお話を受けまして、短い時間ですけれども、ディスカッションを始めたいと思います。まずは、今日のシンポジウムのタイトル、「世界遺産「百舌鳥・古市古墳」を守り、活かし、そして未来へ」ということですが、「百舌鳥・古市古墳群」の魅力、あるいは価値やその意義について、まずはそこを押さえて、それぞれの先生方のご意見を聞いていきたいと思います。

下田先生のお話で OUV という言葉が出てきましたけれども、その意味の解説も合わせて、下田先生に口火を切っていただきたいと思います。よろしくお願いします。

（下田）

はい。百舌鳥・古市古墳群が世界遺産に登録されましたのは 2019 年で、私自身は 2016 年からこの推薦に携わる機会をいただきました。私が携わる時点では、もうある程度、百舌鳥・古市古墳群の世界遺産の価値は、それまでの積み重ねられた議論の中で定まっていて、ほぼ最終段階での検討に加わったという形でありました。

皆さんもご存知のように、この世界遺産はシリアルプロパティということで、複数の構成資産からなるわけです。この百舌鳥・古市古墳群は 49 の構成資産からなっています。おそらく、日本で一番多い構成資産になるかと思います。たくさんの資産からなっているという、多様な古墳の群としての存在や配置が、重要な価値を形成しています。

推薦書を検討していく中でも、どの古墳を構成資産にするべきなのか、という点が、長い間議論の中心となりました。ご存知のように、日本全国には 20 万基もの古墳があると言われている中で、日本の古墳文化を伝える古墳、つまり世界遺産としての価値を伝える古墳というのは、どれなのか。そこの議論が、世界遺産の価値の議論と常に深くかかわっていたように思います。

下田 一太 氏

日本の古墳は、大小さまざまありますが、規格、形としての決まりがあって、中心となる古墳に、陪塚（ばいづか）という附属する古墳がついていることもあります。そういった当時の社会ですとか、政治の構造を古墳から推測することができるのですね。こうした古墳から、政治、社会的な様相を理解できる点が非常に重要な特徴です。ただ、それを示すにあたって、ここはヤマト王権の中心地であったと思われますが、その他に地方の古墳まで広く含めて構成資産にするというような案も、ありえたわけですね。日本全国の古墳によって、日本の古墳の総体的な価値を伝えるということが、一つ理想としてはありえたと思いますけれども、現実的に多くの自治体で協力をして、同じ方法や考え方のもとに保存して、そのための環境を整えるのは難しい。そうした中で、ある程度まとまりのある、それもヤマト王権の中心にある古墳ということで、この百舌鳥・古市古墳群が古墳を代表する存在として選定されたことになります。

百舌鳥・古市古墳群の中にも、築造当初は 200 基以上、現在は 89 基もの古墳が残っている。その中で、結果的に 49 基の古墳となりましたが、どれにするかというのが非常に難しい問題で、価値の問題と直結していたと思います。外国から専門家をお呼びして、どうしたらいいか、とご意見を伺うこともありました。「世界で一番大きい古墳一つ選べば、間違いなく世界遺産になりますよ」という意見や、「世界で一番と二番。応神天皇陵古墳も含めて、2 基の古墳が良いのではないか」といった意見をおっしゃる方もいました。

ただ、日本の考古学研究の蓄積の上で明らかになっている、古墳から、社会、政治というのが見えてくるという点を示すためには、どの古墳が必要なのかというようなことの議論になり、この古墳群の 89 の中から選ぶという形で検討が進みました。現実として保存状況があまりよくないとか、周辺に住宅地が迫っているとか、高い建物があるとか、そういう条件を踏まえて、49 基が最終的には選定されました。これらの古墳の中で示せる価値は何か、という枠組みで議論をすることに対して、おそらく考古学を専門とされている先生方の中では、忸怩（じくじ）たる思いを持たれた方もいらっしゃったのではないかな、とは思います。

世界遺産になったものと、なっていないものとの間で、何となく価値の格差があるみたいな誤解が生じないか、という懸念もありました。実際、他の日本の国内の世界遺産でも、本来は同等な価値を持っているはずなのに、世界遺産として登録されたかどうかで、そうした勝ち

組、負け組みたいなものも出てきてしまう。世界遺産にするためには、わかりやすい説明にするために、価値も絞り込むし、構成資産も絞り込む。絞り込むことによって、本当に本来重要だったものが省かれてしまう、ということもあると思います。しかし、世界遺産に登録された後は、構成資産にならなかったものも含めて、一体としてすべてが重要だということをうまく伝えていく、ということが必要だと思います。ここ「百舌鳥・古市」で、世界遺産にならなかったものも一緒に見ていただく、それからここに来た人が、今度は日本国内の他の古墳を見て、これと一体になっている価値とは何かというのを学んでいただく窓口、きっかけになる。そういうふうな形で、この価値というのが、世界遺産のOUVという限定されたものから、もっとその周辺の広いところに広がっていくといいな、と思います。

（伊藤）

はい。ありがとうございます。世界遺産になった古墳とならなかった古墳というのも、下田先生に言及していただきました。百舌鳥古墳群や古市古墳群の中には、世界遺産の構成資産とそうでない古墳とがあります。それらの古墳について、価値が高い低いという話になってしまうんですけども、決してそうじゃない。同じ古墳群の中に造られて、もちろん相互に有機的な関係が持って造られているわけですから、同じく重要な歴史的な遺産ということで、守っていかなければならないのかなと思っています。

それでは、古市古墳群や百舌鳥古墳群は古墳がメインですので、考古学あるいは歴史学の視点から、その魅力、価値、意義について、中久保先生にお話しいただければと思います。

（中久保）

中久保 辰夫 氏

下田先生から、お話いただいた話とも少し重複する部分も、あるかもしれません。日本の古墳文化について調べていけばいくほど、世界のさまざまなお墓と比べると、かなり独自なところがあるということもわかって参りました。日本の古墳の特徴というのは、大・中・小、さまざまなサイズがあって、それがそれぞれに意味を持って、地上に記念物として遺された。こうした歴史があるというのが、日本列島の歴史の中で非常に重要である、ということも明確になってきました。

私はひねくれものですから、小さな古墳のほうが好きでして、小さいほうが意外と情報があると思っています。自分たちの街に、もしかしたら小さな古墳が足元に眠っているかもしれないということを知っていることが、遺跡保護につながるだろうと思うからです。

日本の古墳文化の歴史的な価値というのは、秩序ある多様性があるということです。さまざ

まな形状とさまざまなサイズが、一見秩序がないように見えるんだけども、そこには一つのルールがある。そして日本の古代国家が形成されていく中で、政治的な身分秩序を示した、統治のための墳丘墓築造というところが、歴史的な価値と思います。

古いことわざで、「蓋棺事定」といって、棺の蓋を閉めて、物事が定まるという言葉があるそうです。その人物の評価というのは、埋葬するときに、棺を閉じるときに、その人がどうあったのかということを知ることができるんだという、そういう言葉だそうです。まさに、日本の古墳文化というのは、有力者が亡くなって、墳丘を造って、埋葬し、古墳が完成したときに、その人物の政治身分的な評価が定まった、そういった時代でもあります。今となっては、古墳時代という時代、その古墳を築造した地域の評価が、墳墓を通じてわかる。これが歴史的な価値になると思います。

ただ、これは歴史的な価値でありまして、世界文化遺産というのは、歴史的な価値というより文化的な価値が重要です。我々、日本の考古学者は、主に歴史的な評価をしてきたわけですけども、今後はいろんな世界各地と比べたときの、日本独自の文化的な価値、さらには墳丘墓の土製構築物の芸術的な価値、建築学的な価値など、さまざまな価値づけを改めて行っていかないとも感じています。以上になります。

（伊藤）

はい。ありがとうございます。本日講演のトップバッターの中久保先生のお話、スライドでもご紹介いただきましたが、ヨーロッパの墳丘墓のことの説明がありました。マウンドを持つお墓のことを墳丘墓と呼んだりしています。日本の「古墳」というのは、学術的に意味を持たせて、日本独自で使う言葉だ、と私は思っているんですね。大きなマウンドを持った墓というのは、実は縄文時代にもありまして、またいわゆる「古墳」が造られなくなってからも、このようなマウンドを持ったお墓というのはあるんですね。それらと区別するために、考古学では古墳の代表である前方後円墳との関係を考えているわけです。前方後円墳は、３世紀の半ばから６世紀の終わりぐらいまで造られるわけです。前方後円墳が消滅した後も、墳丘を持ったお墓はもうちょっと後まで残って、それでも７世紀のいっぱいまでぐらい、８世紀の初めぐらいまでですかね。例えば、奈良県明日香村の高松塚古墳とかキトラ古墳は、それぐらいの時期だと思います。今の考古学では、そのように時期を限って「古墳」と呼んでいるんですね。

マウンドを持った、土を盛ったお墓なことを、一般的に墳丘墓という言い方をしていて、中久保先生のタイトルは、そういう意味もあったのかなと思っています。中久保先生には、ヨーロッパの墳丘墓とか、あるいは中国の漢の皇帝のお墓などの紹介をしていただいたかと思います。私も地元の古墳のことを勉強していまして、大きな古墳の周りに小さな古墳が附属するといいますか、接近して存在する、陪塚あるいは陪冢と呼びますが、これは日本の古墳では特に５世紀代の古墳によく見られます。それが海外にも、例えば中国にも存在するというのを聞いて、びっくりしたんですね。そういうもんなんだと思って、やっぱり海外と日本の事例を比較するというのが大事なんだというのを思った次第です。中久保先生、ありがとうございます。

それでは中村先生は新聞記者ですので、ジャーナリストの視点から、「百舌鳥・古市古墳群」の価値、意義や魅力をお話していただければと思います。

（中村）

はい。ジャーナリストの視点っていうのはなかなか難しいなと思うんですけど。本当に一般的な、市民の目線ということだと思います。

中村 俊介 氏

私ね、3 年前に百舌鳥・古市古墳群がちょうど登録されるときの年の春に来たんですね、大阪に赴任したんですね。それで、まず最初に何やるかと、それは百舌鳥・古市古墳群が世界遺産として今年登録の審議がされるからということがもう頭の中にありましたので、仁徳さんのところのレンタサイクルで自転車を借りて、自転車、電動付きにするか、しないか、大分悩んで、自分の足を信じたら、もうすごく後悔した覚えがあるんですけどもね。とにかくチャリンコを借りて、この百舌鳥・古市を可能な限り、走り回りました。

当然、応神さん、仁徳さん、ああ大きなと思いました。中には入れないけど、大きいなと感動しました。そして例えば、古室山とかは本当に綺麗に整備されて、皆さんがお弁当食べているんですよね、家族が。これもいいねと思いました。あと、確か、もっとたくさん小さいのがあるはずだと思ったんですよね。さっき下田さんの話があったようにいろんな種類がある。中久保さんもおっしゃいましたね。多種多様である。小さい古墳は一体どれか、なかなかわからないんです。ひょっとしたらこれかなと、家の裏にある里山みたいなもんだよねと、これも古墳かなと。地図を見ると、これも古墳。藤井寺の近くに行くと公園がありました。何か小山のようなところで、みんな子どもたちが走り回って遊んでいるんですよね。こんなところに公園があるんだねと思ったら、これがまた古墳なんですね、遊び場になっている。

つまり、先ほどの特徴というのもありましたけれども、古墳らしい、世界遺産らしい世界遺産、古墳はもちろんたくさんあるんですけど、すっかり地元に密着して、その市民生活の中に溶け込んでいるような、小さな小さな古墳、もうこれ歴史遺産かと思うようなものまで包含している。このギャップと言ったらおかしいですけれども、バラエティーの豊かさ。この特徴に、何か私はショックじゃないですけどもね、感銘を受けました。ああこんなものまでという感じですかね。つまり、歴史遺産というのは、本当地元に溶け込んでいて、初めてと言いましょうか、価値というのがわかるもんなんだな、と思いました。これは、仁徳天皇陵にしても、応神天皇陵にしても、例えば、濠の水は、これまで実際に灌漑用水にも使われてきましたし、木々はたき火の原料、薪（まき）の原料とかにもされてきました。つまり、地元の人たちと密着して生

きてきたんですね。地元の暮らしの中に重要ならば、それを守っていかなくちゃいけないというような、コミュニティーの、だから大事にするんだ、という意識があったと思います。もちろん、律令制下の延喜式とか、そういう法律的なものでも最初のうちは守られてきましたけれども、それから後世になると、社会、地域社会が守ってきた。それが、一番如実に見えるのが、この古市古墳群や百舌鳥古墳群のような気がしてなりません。それが、今の質問で言う、私にとっての、ある意味、ジャーナリストというよりも、私にとっての、この古墳の価値のように思います。

それともう一つ、先ほど下田さんがランキングの問題もおっしゃいましたね。私も、これは常に考えてきたところなんですね。つまり、世界遺産がトップとして、そして国宝とか重要文化財、国内の制度があって、そしてそれ以外。世界遺産になったら、それ以外にならなかったものは、価値がないのか、そういうランキングというか、線引きが行われてしまうんじゃないのか。もしそうだとするならば、ならなかったら、うちの財産には何の価値もないよ、というような思いを起こしてしまうとするならば、世界遺産というのは果たしていいものなのだろうか、というふうに、かつて考えたこともあります。このようなランキング、制度上できるのは、しょうがないかもしれません。私、こう考えるようになりました。世界遺産があるんだったら、ユネスコの世界遺産がある。そして、その下と言っちゃうとおかしいですけど、国内の文化財保護法の中での文化財というものがあって、そしてさらに地元の人たちが守るものがある。これは、どんなに制度が違っても、自分たちの、人類の宝、共通のもの、財産を、歴史遺産を守ろうという目的は一緒なわけですよね。ならば、これをすべて包含するような、一つのものとして考えればいい。世界遺産にはなれなかったけども、そのなれなかった部分、じゃあ国内遺産で補完しようとかね、いい上下関係ではなくて、そのように一体的にとらえて、初めて広い面的な保護というのができるんじゃないのかな、と思いました。しかも、これは世界遺産のユネスコの作業指針の中にも、あるいはこのほど改正された文化財保護法の中にも、これから地域の力というものをどんどん活用していかなければ、皆さんに手伝ってもらわなければ、歴史遺産というのは守れないということが、そういう流れになりつつあります。ですので、すべて世界遺産も、国内文化財も、地元の小さな小さな村の祠とか、神社とか、鎮守の神様とか、それも含めて有機的に結びつけながら守るという視点がこれから大事になっていくんではないのかな、というふうに思います。以上です。

（伊藤）

はい。ありがとうございます。そうですね、中村先生が言うように、文化財保護、あるいは世界遺産もそのように考えなくてはならないのかもしれません。文化財の保護については、2019年でしたか、文化財保護法が改正されました。今まではどちらかといえば、保存に力を入れてきて、それに軸足を置いてやっていこうという姿勢だったんですね。ところが、この改正で活用のほうも重視しようということになりました。その中で、文化財を守っていく主体、それは、もう地域の皆さんで総がかりで守っていこうということも、うたわれていたように思

います。これから日本の人口も、もうピークを過ぎて減っていっているということですよね。これから人口も減っていくということなったら、今まで通りの保護のあり方とか保存のあり方とか、そういうのを今少し見直していかなければいけない、というふうに思っています。今の中村先生のお話を聞いていて、やっぱり切実な問題かな、というふうに思いました。

それでは、保存とか保護の話が出ましたが、保存のあり方、とりわけ整備のことですね、あるいはその一つの方法である復元について、今日も下田先生のお話にありましたが、そのことについて議論していきたいと思います。史跡の整備、あるいは文化財の整備というのは、日本では文化庁がマニュアル、手引きを作っていて、それに即して、整備をしたり、復元をしたりということをやっているんですね。しかし、世界遺産の構成資産については、そのマニュアルを参考に整備を検討するのですが、自由にできないというか、従前の通りにできないというのがあるんですね。

世界遺産というのは、先ほど下田先生のお話にあったように、OUV、顕著な普遍的な価値が、大事なんだということですね。それを担保する真実性、オリジナルのもので造られているんだということ、それが大事であると言われているんですね。例えば、そこに階段をつけたりとか、土を盛って形を変えてしまったりというのができない、ということもあるんですね。

そういった世界遺産としての整備のあり方、あるいは整備の一つの方法である復元について、下田先生から先ほどお話をいただきました。ちょうどこの会場である LIC はびきののすぐ南側に、峯ヶ塚古墳という古墳があります。この古墳は、世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」の構成資産です。1 週間前に発掘現場を公開したんですね。発掘調査の現場を、多くの皆さんにじかに見ていただいたんですね。今日みたいな寒い日ではなくて、大変暖かくて気持ちのいい日でしたので、総勢でおそらく 700 人ぐらいの方が見に来られたんですね。また、地元の小学生、あるいはその教員の方も来られて、数百人の、児童とか生徒の皆さんに見ていただいたというふうに聞いています。その峯ヶ塚古墳を発掘している理由というのは、この古墳を整備していこうということです。復元も視野に入れようということで、発掘調査をやっているんですね。こういった世界遺産の整備、あるいは復元に関連して、下田先生に、世界遺産における復元の経緯とか、課題について、もう少し詳しくお話いただければと思っています。よろしくお願いします。

峯ヶ塚古墳発掘調査 現地説明会

（2021 年 12 月 11 日）

（下田）

はい。先ほどの報告の中でも少しお話をしましたが、最後はちょっと尻切れトンボみたいな

形で終わってしまいました。整備復元について、今、伊藤さんからもお話ありましたように、世界遺産になって、日本におけるこれまでやってきた方法というのがそのままは通用しないというか、もう一つ別のスタンダードに切り換えていく、あるいはそれも視野に入れて両方に説明がつくようにすることが必要になると思います。

今日、最初に私のスライドでいくつかの復元事例、大阪城も含めて見ていただきましたように、国内ではさまざまな歴史的な建造物等は復元されて、遺産の価値を伝える上で非常に効果があると思っています。教育的な効果もありますし、更地になっているところでは理解できないものが見えてくることで、体験として感じることができるようになります。

ただ、基本的にユネスコ世界遺産においては、現状を維持するというのが保護のための基本方針となっています。Preservation（プリザヴェーション）、現状を維持するという考え方がベースにあるというのは、基本的にヨーロッパの石の文化が大きく影響していると思います。石そのものはなかなか朽ちることはない。石造建造物というのは壊れても、その周りに石のブロックが散乱して残るわけですね。ですので、修理するといえば、落ちている石材を元に戻す。アナスティローシスと言いますけれども、それが修理で、それが正しい、真実性のある修理だというふうに考えられていました。そういう歴史的な理解があって、ベニス憲章をはじめとする国際的な憲章等で、そういったことが説明されてくるわけです。ただ一方で、日本のように朽ちてしまう木の文化、あるいは残っているのは地面、あるいは土だけといった中では、そういった方法では遺跡の価値や遺産の価値を伝えられない。

そういった中で、日本独自に、あるいは東アジアとして、そういった復元という行為をこれまで開発して蓄積をしてきた経緯があります。ですので、古墳群を世界遺産に推薦するにあたって、そうした手法や考え方を海外に積極的に説明するという手もあったかと思います。しかし、まずは世界遺産に登録するというのが至上命題としてある中で、その議論でぶつかるのは避けたいというのがあって、まずは Preservation という方針で説明してきていたというのが現実だと思います。

ただ、日本の復元を伴う整備というのは、さまざまな効果がある。教育的な効果もありますし、物として造ることによって、わかってくることもたくさんあるわけですね。復元的工事を行うためにはさまざまな研究が必要ですし、実験考古学によって理解されることもある。また、日本の復元では、必ず土の遺構部分を保存して、その上に土を盛って上物を復元するわけですから、オリジナルな遺構そのものは、Preservation されるわけです。

そういった条件をしっかりと国際的に説明して、日本としての復元の効果、意義をしっかりと説明しながら、理解を得ていくということが、今後必要になるかなと思います。そこで、世界遺産として墳丘そのものが復元されても意味があるんだということをどう伝えられるかということが、鍵になってくると思います。今日、中久保先生からお話ありましたように、墳丘は Stage、ステージなんですよね。ですので、ステージに人が乗って、そこで行為をするということ自体が古墳の価値の一つで、そこから物を見て、その上に乗っている人を下から見上げる、それ自体が古墳の一つの価値だと思います。そういった場を造るということは、その世界

遺産としての価値をちゃんと伝えていく上でも必要だという、説明はできるのではないかなと思います。

（伊藤）

はい。ありがとうございます。今のお話聞いていて、私もなるほどと思いました。そうですね、近つ飛鳥博物館に仁徳天皇陵古墳の模型が置いてあって、あれを見れば当時の古墳の姿がよくわかると思うんですね。また、今日の先生方のスライドをあったと思うんですけども、兵庫県の五色塚（ごしきづか）古墳ですね。五色塚古墳に行けば、今、復元をしていますので、当時の古墳の一定の姿が理解できる。墳丘斜面に石が張り詰めてあって、それで平らな面は埴輪が置いてあって、そこにも石が敷かれて、というイメージですね。また、そういう埴輪とか、石だけじゃなくて、ひょっとしたら木製の構造物みたいなものもあって、それが立ち並んでいた可能性もあるんですね。実際にそういうものが確認されている例もあります。墳丘の上は、非常ににぎやかな状態であったのではと思うのですが、そこで被葬者に対しての祭祀をしているんですね。だから、古墳の復元を行う際にも、人が墳丘に上がることができて、下からも墳丘上を臨むことができて、当時はこういう姿だったんだ、というのがわかるというのは、なるほど古墳の価値の理解が進むなと思って聞いていました。私には、ちょっとそういう発想がありませんでした。勉強なりました。

中久保先生は考古学のご専攻なので、考古学的な遺跡全般ですね、古墳にとらわれず、考古学的な遺跡の復元とか整備の意味やメリットについて、幅広くいろいろな意味で、もしお考えやご意見があれば、お話いただければと思います。

（中久保）

私は、考古学的な遺跡の復元整備は、発掘調査によってさまざまな遺跡情報を獲得し、できる限り当時の状況が適切に復元されることが大切と考えます。そして、保存と復元がなされ、それを教育的に、地域の社会学習の場として活用されるというのが、やはり本義であると思います。日本各地で史跡整備がなされてきた事例の蓄積を基礎に整備がなされていく。これが、やはりあるべき姿であり、模範的な回答だと思うんです。

今城塚古墳公園の復元埴輪で遊ぶ子どもたち（高槻市提供）

他市の事例になって大変恐縮なんですけど、最近の史跡整備でありますと、高槻市の今城塚（いまじょうづか）古墳や安満（あまん）遺跡の整備が、新しい形の活用のあり方と思っています。皆さんには、ぜひ平日の夕方に行っていただきたい

弥生時代の遺跡を整備した安満遺跡公園（高槻市提供）

んです。今城塚古墳の公園では、遊びまわっている小学生の姿をみることができます。安満遺跡公園では、中学生や高校生がダンスをしたり、それを動画撮影したりしています。これまでの史跡公園とはちょっと違った、新たな形が生まれつつあります。

「どうして平日の夕方に人が集まるだろう」ということを、市の方に聞いてみたことがあります。すると、高槻市は市街地化が進んで、自転車とか車が怖いので、子どもたちが走り回れる空間がないことが一つの原因になっていると伺いました。一方で、史跡公園は非常に広いので、十分に走り回って、またはゆっくり座って、落ち着いて、さまざまな活動ができるということです。ファミリー層にとって、子どもたちにとって、遊び場としての価値、くつろげる場所としての価値というのも、広大な史跡公園だからこそ生まれる価値になると思います。史跡整備に関しては、学術的な調査に基づく復元整備のあり方に加えて、住民にとって価値がある、そういった整備のあり方というのを考えていく必要があると考えます。個人的には、峯ヶ塚古墳の公園で、そういった世界が広がっていくと良いと期待します。以上です。

（伊藤）

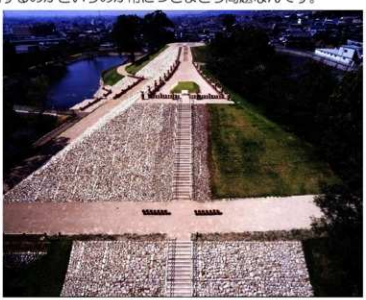
はい。ありがとうございます。今、峯ヶ塚古墳のことも触れていただいたんですけども、古墳の周辺は峰塚公園といって、広大な公園になっているんですね。そこには、やっぱり休みの日とかは、ご年配の方もウォーキングとかジョギングをされたりとか、あるいはファミリー層、ご家族連れで遊びに来たり、そういうシチュエーションはありますね。確かに史跡地の広いところで、ゆっくりとくつろいで、いろんな楽しみ方、あるいは活動ができるといった価値があるんだなと、住民の方々にとってさまざまな価値があるんだというご意見を興味深く聞かせていただきまきました。

それでは、次に中村先生には、取材等で海外の世界遺産、あるいは歴史遺産の整備の事例、あるいは活用事例なんかをご覧になられていると思います。海外の整備事例、あるいは活用事例について興味深い事例があれば教えていただければと思います。

（中村）

はい。整備はね、いろんなその資産、特に、本当に独特に特徴ある活用のやり方をやっていますので、なかなか一概には言えないんですね。

先ほど、復元の話がありましたよね。この整備の一環として復元というものがあるんですけども、この復元をするというのはなかなか難しいところがありましてね。こういう歴史資産というのは、例えば古墳だってもう1000年、千何百年の歴史があって、いつの時点を復元するのかという問題が常につきまとうんですね。何が正しいっていうものはないんですけれども、例えば先ほどのような、これ下田さんのスライドでしたよね、五色塚とか、あるはナガレ山とか、実は古墳というのは、今はああいう森があって、あれが最も古墳らしいと僕らの感覚ではあるんですけども、古墳が造られた当初はもっと人工的なものだったんですね。石がいっぱい貼ってあって、石でできた、石を貼り付けてできた人工物、それが太陽にきらきら輝いて、というような代物だったと思います。今の、山のような自然の姿と似ても似つかないもの。それをどちらの姿に、今の古墳らしく整備するのか、あるいは当時の、造られた当初に戻すのかというのは、やはり議論があって、何が間違い、正しいというわけではないんですけども、それだけの長い長い時間の中で、古墳、一つの古墳をとっても、どんどんどんどん姿を変えていっている。その中の、いつの時点を復元するのかというのが常につきまとう問題なんです。



復元整備された心合寺山古墳（八尾市提供）

それで、先ほどの神戸の五色塚は、えいやっと、築造当時の、新しい、当初の姿を復元している。これも正しい。先ほどの、ナガレ山、鳥見古墳群のナガレ山とか、大阪の八尾ですかね、心合寺山古墳というのがあるんですけども、それは半分が木々が植わっていて、あとの半分は全部この石を張り付けて造っているという、折衷様式になっていますね。こういうのは、いくつか、長野とか、関東のほうにも確かあったと思います。これも、また一つの復元の仕方、まあ一気に今までの様子と昔の様子がわかるわけですね。いや、やはり、その里山っぽくしないと駄目だというような復元の仕方もたくさんあります。こういう解答はないものなんですけれども、これはよく悩む、悩ましいところですね。

世界とおっしゃいましたけども、実は例えば先ほどの燃えたノートルダム大聖堂、あれは、昔、もう本当に何世紀もかかって、確か造っている。ケルンの大聖堂だって、あれは600年ぐらいかかって造っているんじゃないのかな。ものすごい時間をかけて造っていて、その中でいろんなゴシック様式とかロマネスク様式とか、いろんな様式が混ざっていっているんですね。ノートルダム大聖堂が燃えました。あのときに、一番高いところである塔は、あれはもう落ちたんですけども、あの塔自体は、実は意外と新しくできているんですよね。それで、修復するには、もっと今の修復の仕方でもいいじゃないかという、フランス政府がコンペをやりまして

ね、ガラスで塔を造るとかいう案も出たようです。いやいや、元の通りにするべきだっていう案も、もちろんありました。結局、元のような、焼けた当時の形にすることになったようなんです。

時間によっても、いつの段階、今の段階で新しいものを造っても、例えばルーブル美術館の中には、あの宮殿の中に三角形のガラスの造形物がありますが、あの下にチケット売り場があるんですけれども、あれ最初はものすごく…、この間亡くなったデザイナーが造った、建築家が造ったんじゃなかったですかね。あれも不評だったんですけれども、実は、今だとルーブルってそんなもんだよね、というガラスのピラミッドがある、真ん中にあるよね、というような、何か妙に馴染んできたり、そういう時間の、なかなか難しさもあります。

あとはワルシャワだって、世界遺産なんです。ポーランドの首都であるワルシャワも、全部、空襲で全部やられたんですけども、あそこは正確な図面があって、それを一からやり直した。オリジナルはおそらくないと思いますけれども、オリジナル通りに復元した。その努力というのが一つの世界遺産の価値になっています。さっきの最後のバーミヤン、あれは仏像がなくなっちゃったんですけれども、結局その仏像をもう一回造り直すか、それともそのままにして負の遺産として後世まで伝えていくか、ここでもやはり議論が分かれています。

つまり、繰り返し申し上げますように、復元するということは、それだけのいろんな賛否両論があって、何が正しいのか、正しくないのか、結論のないような、非常に難しい問題なんですけれども、結局はですね、地元地元という今日はお話が出ていますけれども、やはりそれを守ってきた地域コミュニティーの判断というのも、非常に重んじられるようなことになっていますね。ですから、さっきのバーミヤンもね、意外と地元では、大仏を復元して欲しいという声がありますので、今こういう状況にアフガニスタンはなっていますけれども、どうなっていくんでしょうね。

ちょっと質問の趣旨とは少し変わりましたけれども、復元ということを、お二方の先生方のお話を聞いていて、ちょっと思ったことを申し上げました。

（伊藤）

ありがとうございます。復元については、やっぱり大変難しい問題だと私も思いました。今の古墳の現状が、やっぱり私たちが見ている古墳の姿になりますので、それを当時の姿、人工的な、いかにも人が造りました、という姿に戻すのがいいのか、あるいは里山というか、樹木が生い茂った姿がいいのかというのは、意見の分かれるところで、これからもいろいろな議論を重ねていって、より良い整備の方法、あるいは復元の方法を考えていくことができたらいいなと思っています。ただ、大変難しい問題だなというのは改めて認識させられました。

それでは、時間も無くなってきたのですが、最後の話題に入りたいと思います。世界遺産の活用や継承、次世代に残していくということについてです。私たちの住んでいる、このまちのまちづくり、あるいはひとづくりにとって、世界遺産が果たす役割、あるいはその効果、またどういった役割、あるいは意味があるのか、というのを考えていきたいと思っています。

よく言われることは、世界遺産になったんだから、人がたくさん来て、観光的にも、経済的にも潤ってということで、やっぱりたくさんの人を来ていただきたい、という考え方もあろうかと思います。でも、課題がないわけではないんですね。そのあたりについて、先生方一人ずつ、お話を聞いていければと思っております。中久保先生からよろしくお願いします。

（中久保）

そうですね。まちづくり、ひとづくりにとって、世界遺産が果たす役割ということですが、こと世界遺産は、観光的ないし経済的な視点がよく言われて、それが対立を生んだり、課題があったりする。このことは、中村先生のおっしゃる通りと思います。

ここで私が皆さんにお話したいのは、ぜひこの世界遺産の価値づけについて、福祉の観点から考えていただきたいと思っています。そのことが、羽曳野市民でよかったな、羽曳野に生まれて育ってよかったなという、遺産の活用につながればというふうに思っております。

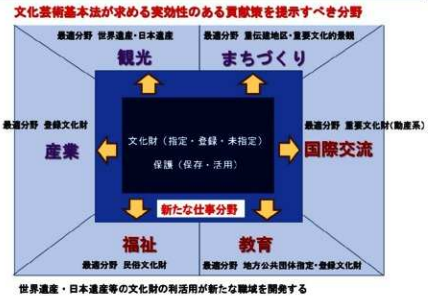
福祉というと、非常に広い概念じゃないか、というふうになりますけど、他市でこれから取り組まれていることで言いますと、例えば、コミュニティバスを活用するというのがあります（『明石市文化財保存活用地域計画』）。古市古墳群は非常に広いですので、一つ一つの古墳を歩くのには、なかなか距離があったりとか、なかなか体力がないとしんどいところもあります。しかし、コミュニティバスの路線を古墳の周りを通るようにするとか、駅に向かうようにするとか、市民にとって便利なものにする。他の市では、古い街並みや資料館などをつなげて、そういったことから計画を立てている。羽曳野市の場合は、例えばバス停の名前を「峯ヶ塚古墳前」とかにするなど、できるところから始めていくことが大切です。

健康という面では、誉田御廟山（ほんだごびょうやま）古墳（応神天皇陵古墳）を一周すると、これはもう20分以上かかりますので、有酸素運動になるわけですね。私も、運動しないといけないので、こういう発想になります。非常にいいウォーキングコースです。小学校とか中学校は、マラソンコースにすることもできるかもしれません。ウォーキングコースにするには、道路を安全したほうがいいですし、お住まいの方の迷惑にならないようにしたほうがいいと思います。車や自転車も気になりますし、少し休憩するようなベンチなどがあったほうがいいかもしれませんし、こういったことには、やはりお金がかかってくるわけです。そうしたとき、文化財保護に関するお金では足りないとなる。福祉と文化財をつなげていって、文化財以外のところから、そういった補助が得られるようにすると、そういった形のまちづくりができるんじゃないかなという、そういう話です。

「文化芸術基本法」という法律があります。議員立法になります。それの第2条第10項に、「文化芸術に関する施策の推進に当たっては、文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造に活用することが重要であることに鑑（かんが）み、文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮されなければならない」とあります。こう

いう法律を活かせば、人材育成、学校教育、文化開発、文化観光開発、社会文化発展をマスタープランにした、そういった連携が組めるんじゃないかっていうふうにも考えております。

ぜひ、世界文化遺産を福祉の観点から活かしていく。長寿大国日本だからこそ、世界に発信できる価値になるかもしれない。古墳ウォーキングをして、羽曳野市の方は、大阪の中でも特に健康的で長生きされているなというような、そういったこともできてきてもいいのかな、というふうに考えておるところです。少し長くなって恐縮です。



文化芸術基本法が求める貢献分野のイメージ図

村上裕道 2022「地域の文化財を生かしたまちづくりの推進－文化財の持続力を高める文化財保護法を踏まえて－」『市政』2022 年 3 月号 vol.71

（伊藤）

はい。ありがとうございます。非常に興味深い考え方だと思います。福祉の観点と、世界文化遺産をつなげるという発想は、非常に新鮮な考え方と思いました。興味深い考え方だなと思って聞かせていただきました。それでは、次に、下田先生、よろしくお願いします。

（下田）

はい。まちづくり、ひとづくり、それから世界遺産が果たす役割、効果ということで、三つぐらいありましたので、それぞれについてお答えできる範囲でと思います。

まず、まちづくりですけれども、今日、私、古市駅からここまで歩いてくる間に、世界遺産になってどう変わるかな、みたいなことを考えて歩いていたんですが、そうは言っても、まちづくりというものは、一朝一夕になるものじゃないとは思います。先ほど伊藤さんもおっしゃったように、今、日本の人口増加等々に考えても、ピークから減少して、今後、少子高齢化が進んでいくという中で、より長期的に考えて、まちづくりをしていくことが重要だろうと思います。グランドビジョンと言っていいのかわかりませんけども、30 年とか 50 年とか 100 年後にどうすべきなのか、ということを思い描きながら、それぞれ 5 年 10 年単位で更新して修正していきながら、未来を描いていくこと必要と思います。

中村さんが先ほどウィーンの事例を紹介されて、番号が振ってあって、これだけ建ってしま

っているんだからいいじゃないかって、面白いなと思ったんですけれども。景観の観点からいうと、景観のガイドラインは、よく調和すること、現状の何かスカイラインに調和しなさい、とか、色を調和させなさい、デザインを調和させなさい、と言うんですけども、現状の景観は少しずつ蓄積されていって、変わるんですよね。ですので、少しずつ切り崩されていって、調和する環境自体が変わっていくと思います。ですので、30年、50年かけて調和するものが、どんどん良くなっていく、ということを目指して欲しいし、その目標は何なのか、古墳のあるまちというのは、どういうデザインを目指すべきなのかということを、議論していくということが必要だろうなと思います。

それと、もうちょっと短期的なということで申しますと、明確に動線、ウォーキングマップとかでありますので、あると思うんですけども、魅力的な複数のストーリーがあって、何回もリピートしてくれて、初心者向けだと、玄人(くろうと)向けだと、こういったことに関心があるといった、いろんなストーリーを作っていってもらって、それらストーリーの中でいろんな仕掛けを組み込んでいってもらえたらいいのかなと思います。スマホを利用したりとか、いろんなツールもあると思いますし、案内板とかも、駅からここに来るまでにもいくつか古墳を説明する看板があって、ああそうだなあと思ったんですけども、もっと道行く人に伝えていってもいいのかなとか思います。

あとは、そういった動線の中に、拠点となるガイダンス施設、その地域の古墳の、あるいは古墳以外のものも含めてもいいと思うんですけども、そうした施設が羽曳野市にもできてくれるといいだろうなと思います。既存のものもありますけれども、よりよい拠点となるもので、一方的に伝える施設というより、まちづくりにも一役担(にな)ってもらえるような施設ができてくるといいかなと思います。

それと、ひとづくりというところでいきますと、先ほどもちょっと復元のところでお話しましたけども、地域住民が決定に参加する仕組みが必要かと思います。ただそうは言っても、「じゃあ、意見出してください」と言われたって、皆さん、わからないというのが実情だと思いますので、行政側がちゃんと説明をして、選択肢を設けることが必要だと思います。「この選択肢だと、こういうメリットがあるけど、こういう限定限界があって難しさもありますよ」といった選択肢に関する説明も必要だと思います。それをしっかりとわかって、いい面、悪い面もわかった上で、住民の人に考えてもらう。専門家だってわからない部分もありながら、取捨選択して判断していると思いますが、そうした作業を住民と一緒にできると良いかと思います。将来的に、そういったことを考えた若い人たち、今の学生なん

パネルディスカッションの様子

かが、経験を通じて意見を提示して参加してくれると思うんですよね。ですので、幅広く、そういった意見を出し示して、選択肢を示して、考えてもらうということが、ひとづくりの上で重要かなと思います。

あともう一つ、世界遺産が果たす効果、役割について、簡単ではないと思うんですけれど、期待したいのは、世界遺産、今、日本で 20 件になって、それぞれ特定の分野、時代というものを代表するものが出そろってきたと思うんですね。ここは、古墳という、日本の歴史区分の中でも、非常に重要な古墳時代を代表する。だけど、日本の古墳を一元化して説明している施設というのがない。それから、その日本の古墳を研究する総合的な拠点施設というのも、おそらくないんじゃないかと思うんですよね。日本は発掘調査を全国でやられていて、各行政が、それぞれの地区内のことをやって、非常に厚い蓄積はあると思うんですけども、それを横断的に見て統括するという見方はまだ弱いのではないか。これは大学の先生方が担っているかもしれないですけども、先生方も忙しくて、なかなかそれだけにフォーカスして仕事ができない。だから、やっぱり世界遺産になった地域が、例えば、今回縄文が世界遺産なったのなら縄文の地域が、古墳では大阪が、ということで、羽曳野市や大阪府、堺市、藤井寺市の 4 府市が共同して、ハード面と人を確保して、包括的な日本の古墳研究を担って、その成果を発信しうる施設ができてきたらいいなと、それこそが世界遺産の役割として最も重要な点ではないかなということ思っております。

（伊藤）

ありがとうございます。それでは、時間も少なくなってきましたが、中村先生も、よろしくお願いします。

（中村）

はい。さっきね、観光とか、それから地域遺産、地域活性化、経済的な問題、ちょっと悪口も言いましたけども、これ実は重要です。要するにバランスの問題です。

共存、いかにこの遺跡を守りつつ、有機的にそれを活用しながら、守っていけるか。そして、それを観光、あるいは、経済的に結びつけられるか、というバランス、共存がうまくいけばとは思いますね。実際、これ研究、経済学上の統計からも、一時的には観光客がどっと来て、経済効果あるんですけども、必ず下がっていくもんなんです。そういうもんですよね、普通は。ですから、それも踏まえた上での、どうバランスをとりながら、共存していけるか。地域活性化、あるいは経済的な観光化と、残すことは、共存していけるか。これが、今の SDGs にもかなう話、かなうことになるんではないのかと思います。これは、京都であった、京都会議での京都ビジョンでも、確か明確に書かれてあったと思いますし、バランスが問題だと思いますよ。それを皆さんで考えていきましょう。

（伊藤）

はい、ありがとうございます。最後の話題は、本当に興味や関心をもって、もっともっと議論したいんですけれども、時間のほうが来てしまって、非常に残念です。各先生方のご提案といいますか、ご意見いただいた内容は、非常に重要なことだと思います。これから、できたら私ども行政のほうもそうですけれども、皆さんですね、住民の皆さん、あるいは関心を持っていただける皆さん、あるいはサポーターとして、いつも励ましていただいている皆さんと一緒に、考えていくことができたらいいなと思っております。

伊藤 聖浩

今日のシンポジウムは、その糸口といいますか、入口といいますか、そのきっかけになったらいいなと思っています。なかなか解答は難しいものがあって、たどり着くのが困難かもしれませんけれども、世界遺産の保存、次世代への継承、これにかかる活用のことに関心をもってやっていこうと考えています。引き続き、皆さんのご協力、ご理解、どうぞよろしくお願いしたいと思います。それでは、パネルディスカッションを終わりに…

（下田）

すみません、終わったところで、ちょっと申し訳ありません。一言だけちょっと言い忘れたといいますか、お伝えしたいことがあるのですが。ひとづくりのところで。

今日、たくさん来ていただき、ありがたい。ただ、やっぱり年配の方が多いということがあって、やっぱり、ひとづくりの上で、若い人、次世代の方々がいかに保存に携わっているのかというのが、世界遺産にとって非常に重要だと思います。ですので、皆さん、ここに来られている方、皆さん、今日聞いた話をお孫さんにぜひ伝えていただいて、ぜひお孫さんと一緒に古墳に行っていただけたらなと思います。

（伊藤）

ありがとうございます。何分不慣れで、進行がうまく進まなかったところも多々ありましたが、どうかご容赦いただきたいと思います。今日ご参加いただきました会場の皆さん、長時間にわたりありがとうございました。先生方も、ありがとうございました。これをもちまして、パネルディスカッションを終わりたいと思います。

「世界遺産の古墳があるまち」
（応神天皇陵古墳（誉田御廟山古墳）を北東方向から望む）

「百舌鳥・古市古墳群」世界遺産シンポジウム

世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」を守り、活かし、そして未来へ

シンポジウム記録集

令和 5(2023)年 3 月 31 日

羽曳野市世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」保存・活用実行委員会
（羽曳野市教育委員会、NPO 法人フィールドミュージアムトーク史遊会、羽曳野まち歩きガイドの会、四十四の会）

史跡古市古墳群　応神天皇陵古墳外濠外堤
（撮影 保田 紀元）

世界遺産 World Heritage Site of Osaka
百舌鳥・古市古墳群
Mozu-Furuichi Kofun Group